

福岡市西区

四箇周辺遺跡調査報告書

(4)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集

1981

福岡市教育委員会

福岡市西区

四箇周辺遺跡調査報告書
(4)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集

1981

福岡市教育委員会

序 文

本市では、昭和49年以来の日本住宅公団四箇田団地の造成工事に先行した発掘調査により、同地区周辺には重要で豊富な埋蔵文化財が包蔵されていることが認められたため、昭和51年度より国庫補助事業として埋蔵文化財発掘調査を実施し、開発によって消えてゆく埋蔵文化財の記録保存に努めています。

昭和54年度も2ヶ所の調査を行ないましたが、弥生時代の豪棺墓が確認されるなどの成果を見、同地区における縄文時代から古墳時代に至る集落の形成と土地利用の変遷を知る上で、新たな資料を追加することができました。

本書が、文化財保護並びに学術研究の分野において役立つことを願うものであります。

調査に当りまして、有益な助言をいただいた調査指導員の先生方を始め、関係各位の多大のご協力と文化財に対する深いご理解に深甚なる感謝の意を表します。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 津 茂 美

例　　言

1. 本書は四箇周辺地域における宅地造成等の開発事業に先行して埋蔵文化財の事前調査を行なうことを目的とし、国庫補助を受けて昭和53年度～昭和55年度に実施した四箇周辺地域内緊急調査の報告書である。
2. 事業は福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第二係が行なった。発掘調査・資料整理・報告書の作製は、二宮忠司が担当し、事務は岡崎洋一が担当した。
3. 本書の執筆は、二宮、渡辺利子・小林義彦が分担して行なった。
4. 掘出のうち、遺構の実測は、二宮・渡辺・宮内克己・沢田宗順・小野信彦・寺師雄三が行なった。遺物の実測は、二宮・渡辺・小林が行なった。トレースは二宮が行ない、渡辺・小林・池崎が協力した。拓影は渡辺の指導のもとに高木順子が行なった。
5. 遺構・遺物の写真は二宮の撮影による。
6. 本書の編集は、渡辺・小林の協力を得て二宮が行なった。
7. 昭和53年度調査地点の内、K-10a 地点、K-11a 地点、K-11b 地点と昭和55年度のJ-11d 地点の報告は、すべて杭列遺構・壠状遺構であるためまとめて次年度に報告の予定である。
8. 発掘調査によって出土した遺物・図面・写真は現在文化課と四箇遺跡現場事務所に収蔵・保管している。
9. 本書に掲載した地図は、建設省国土地理院の承認を得て、同院発行の 2.5万分の1 地形図 N 1-52-10-11-4、ふくおかせいなんぶ(福岡11号-4)を複製したものである。

本 文 目 次

第1章	はじめに.....	1
	1. 発掘調査に至るまで.....	1
	2. 発掘調査の組織と構成.....	2
第2章	発掘調査の概要.....	3
第3章	調査の記録.....	6
	1. J-10 k 地点の調査.....	6
	1) 土 層.....	6
	2) 出土遺物.....	6
	2. J-10 l 地点の調査.....	10
	1) 土 層.....	11
	2) 古墳時代の遺構.....	12
	a) 溝.....	12
	b) 出土遺物.....	13
	3) 弥生時代の遺構.....	16
	a) 溝.....	16
	b) 墓 棚 墓.....	17
	c) 土 坂・Pit 群と時期不明の石 墓上 坡.....	19
	d) 出土遺物.....	24
	4) 繩文時代後期.....	33
	a) 包 含 層.....	33
	b) 遺 構.....	33
	c) 遺 物.....	34
	5) 繩文時代前期.....	38
	a) 包 含 層.....	38
	b) 遺 構.....	38
	c) 出土遺物.....	38
	6) 各時代の石 器.....	51
第4章	ま と め.....	55

挿 図 目 次

第1図	四箇周辺緊急調査地点位置図	(縮尺 1/2,500)	VI
第2図	四箇周辺の低湿地遺跡	(縮尺 1/25,000)	5
第3図	J-10k 地点位置図	(縮尺 1/625)	7
第4図	J-10k 地点平面図	(縮尺 1/200)	7
第5図	J-10k 地点土層断面図	(縮尺 1/80)	8
第6図	J-10k 地点出土遺物実測図	(縮尺 1/3)	9
第7図	J-10t 地点位置図	(縮尺 1/625)	10
第8図	J-10t 地点土層断面図	(縮尺 1/80)	11
第9図	土師器実測図-(1)	(縮尺 1/3)	14
第10図	土師器・須恵器実測図-(2)	(縮尺 1/3)	15
第11図	1・2号溝土層断面図	(縮尺 1/30・1/40)	16
第12図	斐棺墓・遺構配置図	(縮尺 1/100)	18
第13図	第1号斐棺内出土遺物実測図	(縮尺 1/2・1/3)	20
第14図	1・2・3号斐棺墓実測図	(縮尺 1/20)	20
第15図	4・5・8号斐棺墓実測図	(縮尺 1/20)	21
第16図	6・7号斐棺墓・土塙実測図	(縮尺 1/20・1/40)	22
第17図	石蓋土塙・Pit実測図	(縮尺 1/20)	23
第18図	1・5・6号斐棺墓実測図-(1)	(縮尺 1/8)	折り込み
第19図	2・3・8号斐棺墓実測図-(2)	(縮尺 1/6)	25
第20図	4・7号斐棺墓実測図-(3)	(縮尺 1/8)	26
第21図	弥生七段実測図-(1)	(縮尺 1/4)	28
第22図	弥生上器実測図-(2)	(縮尺 1/4)	29
第23図	弥生上器実測図-(3)	(縮尺 1/4)	30
第24図	縄文前期・後期遺構実測図	(縮尺 1/20)	33
第25図	土板・縄文後期土器実測図-(1)	(縮尺 1/3)	35
第26図	縄文後期土器実測図-(2)	(縮尺 1/3)	36
第27図	不整形窪穴・縄文前期遺物出土状態	(縮尺 1/20・1/40・1/100)	39
第28図	縄文前期土器実測図-(1)	(縮尺 1/3)	41
第29図	縄文前期土器実測図-(2)	(縮尺 1/3)	43
第30図	縄文前期土器実測図-(3)	(縮尺 1/3)	44

第31図	縄文前期土器実測図-(4).....	(縮尺 1/3)	45
第32図	縄文前期上器実測図-(5).....	(縮尺 1/3)	47
第33図	縄文前期土器実測図-(6).....	(縮尺 1/3)	48
第34図	石器実測図-(1).....	(縮尺 1/2)	50
第35図	石器実測図-(2).....	(縮尺 1/3・1/6)	52
第36図	石器実測図-(3).....	(縮尺 1/3)	53
第37図	四箇周辺の微高地図.....	(縮尺 1/2,500)	56

図 版 目 次

PL. 1	(1) J-10 k 地点旧河川.....	(2) J-10 k 地点全景
PL. 2	J-10 k 地点遺物出土状態	
PL. 3	(1) J-10 l 地点(発掘調査前).....	(2) J-10 l 地点発掘調査中
PL. 4	(1) 溝M-1 検出状態	(2) 溝M-2・3・4 検出状態
PL. 5	各甕棺墓出土状態	
PL. 6	各甕棺墓出土状態	
PL. 7	溝・Pit・石蓋土塀・縄文前期遺物出土状態	
PL. 8	縄文前・後期遺物出土状態	
PL. 9	縄文前期遺物出土状態	
PL. 10	J-10 k 地点出土土器・J-10 l 地点出土土師式土器(縮尺 1/3)	
PL. 11	J-10 l 地点出土土器(土師式土器・弥生式土器).....	(縮尺 1/3・1/4)
PL. 12	甕棺 1~7 号と 1 号甕棺内副葬品	(縮尺 不統一)
PL. 13	縄文後期土器	(縮尺 1/3)
PL. 14	縄文前期土器-(1)	(縮尺 1/3・1/4)
PL. 15	縄文前期上器-(2)	(縮尺 1/3)
PL. 16	各時代の石器	(縮尺 1/3・1/6)

表 目 次

表-1	四箇周辺遺跡の発掘調査地点一覧表	1
表-2	古墳・弥生時代の土塀・Pit 計測表	22
表-3	縄文前期・後期の Pit 計測表	33

付 図 目 次

四箇周辺遺跡 J-10 l 地点全体図	(縮尺 1/100)
---------------------------	------------



第1図 四箇周辺緊急調査地点位置図（縮尺1/2,500）

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至るまで

1975年に始まった日本住宅公団四箇田団地造成地域内の発掘調査が開始されてはや6年目を迎えた。この間、四箇周辺においても宅地造成の波は急増してきた。このため個人住宅の宅地造成には国庫補助を受けて昭和51年（1976年）から四箇周辺遺跡の発掘調査を実施してきた。

四箇遺跡によって明らかにされつつある低湿地における縄文後期の遺跡と弥生・古墳時代の遺構を持つ複合遺跡であったことが判明した事とも関係が深い。削平は受けているが、遺跡の包蔵状態は良好で、四箇遺跡・四箇周辺遺跡での遺構のあり方は重要視されてきた。調査が進むにつれて微高地の存在、水田遺構の発見、基盤である礫層の凹凸による地形形成の問題、団地における縄文前期の発見等である。また近年周辺部の山麓地帯でいづれで古墳群が調査されてきた。昭和54年度には、四箇周辺遺跡（3）で報告した夫婦塚古墳や、古武古墳群、大野二丈線の拡幅工事における金武古墳群古武E群・金武古墳群古武C群の調査や昭和55年度に調査された三郎丸古墳群がある。また台地では、金武で大野二丈線拡幅工事で古墳時代の住居址等が発見されている。低湿地も開発の波は急増しており、四箇遺跡から北側に約1km離れた田村にも奈良～中世の遺構が認められ、田隈地区では、今年度報告される高柳遺跡がある。次郎丸地区では、縄文時代後期～弥生時代中期にかけての遺構・遺物が発見されている。このように低湿地内にも数多くの遺跡が発見されつつあり、早良平野の平野部もしだいに明らかになりつつある。これらの遺跡は四箇遺跡での低湿地の調査を踏台にして大きく広がっている。本年度の四箇周辺遺跡も同様で今までの遺構のあり方を主体においての調査である。本年度は、J-10 e 地点と J-11 d 地点の2地点の約1367m²の建築申請が出されたため、発掘調査の必要が生じた。これが本年度緊急発掘調査の原因となった。

ここ過去5年間における四箇周辺遺跡の発掘地点は次の34地点である（試掘調査も含む）。

表-1 四箇周辺遺跡の発掘調査地点一覧表

（単位m²）

調査済			試掘		
地點	発掘面積	対象面積	地點	発掘面積	対象面積
J-10 a	270	2,470	J-9 a	60	1,125
J-10 b	100	250	J-9 b	80	743
J-10 c	90	447	J-10 j	17	198
J-10 d	50	184	J-11 a	36	165
J-10 e	90	264	J-11 b	45	150

2 発掘調査の組織と構成

(単位m²)

J-10 f	248	396	J-11 e	96	816
J-10 g	300	2,470	J-11 e	20	600
J-10 h	50	200	L-17・18	53.7	1,343
J-10 i	450	462	L-11 a	18	200
J-10 k	150	250	L-11 b	20	400
J-10 l	540	1,043	K-11 c	13	192
J-11 d	177	324	K-11 d	10	40
J-11 a-2	80.4	137	K-12・13	24	645
K-10 a	253	300	J-13 a	70	1,780
K-11 a	145	600	J-12 a	45	255
K-11 b	250	400	J-12 b	16	200
			J-14	78	1,950
			G-10	139	3,492

2. 発掘調査の組織と構成

1976年から始まった四箇周辺遺跡の発掘調査もはや5年目を迎え、現在までに数多くの人達の協力と支えがあった。関係者は次の通りである。

調査担当 福岡市教育委员会文化部文化課埋蔵文化財第二係

事務担当 岡嶋 洋一 事務補助 倉田香代子

調査指導員 楠 昌信

発掘担当 二宮 忠司

調査補助員 渡辺 和子・小林 義彦・宮内 克己・沢出 宗順・小野 信彦・寺師 雄三
池崎 溫子

資料整理 高木 順子・的場由利子

調査池 関次郎・大原 義雄・牛尾 準一・藤田 重美・横 光雄・赤星のぶ江

協力者 伊藤みどり・池 ヤエ・牛尾 クメ・牛尾 秀子・牛尾二三子・尾崎 八重
菊地ミツヨ・菊地 栄子・菊地 キミ・倉光なつこ・藤田 洋子・藤田オリエ
柳 ワイ・白坂フサヨ・下郡フミ子・惣慶とみ子・谷 ヒサヨ・典略 初子
典略 ナミ・鍋山千鶴子・野田部コト・松隈ユキノ・又野 栄子・結城千賀子
結城キミエ・柳浦八重子・吉住フサノ・細川マサエ・真名子千恵子
尾崎 順子・宮崎 幸助・池 信善他

第2章 発掘調査の概要

今年度の発掘調査地点は、J-10 k 地点と J-11 d 地点の 2 地点である。J-10 k 地点は微高地上の遺跡であり、J-11 d 地点は、微高地の裾から段落ちする部分の杭列遺構であることは試掘の結果と隣接地からの予測であった。J-10 k 地点は54年度から55年度にかけての調査であり、3月から4月にかけて調査を行なった。J-11 d 地点は5月から6月15日にかけて調査を行なった。J-10 k 地点は、微高地上に隣接地 J-10 i 地点、J-11 a 地点からつづく遺構が検出されるとの予測があった。しかしながら実際には、それ以上の成果を上げることができた。第1の成果は、微高地を2分する溝(旧河川)の検出、第2は弥生時代中期の墓域(腰棺墓)の検出、第3は独立した微高地の大きさの確立、第4は古墳時代の遺構の検出、第5は縄文時代前期の包含層の検出、第6は微高地内での弥生時代中期のあり方、第7は縄文時代後期における遺跡の広がり、第8は基盤である礫層の凹凸状態が再度確認できた点、第9に微高地は全体の約50cm以上の削平が行なわれていること、第10に微高地の上部にあった遺構はすべて削平されていたことが判明した。

J-11 d 地点では K-11 b 地点の隣接地へ杭列遺構と微高地の裾部の検出が予測された。K-11 d 地点へ杭列遺構がつづき J-10 a 地点の杭列遺構へとつづく杭列のほかに、裾部は認められなかつたが北側に向う堰状遺構が検出された。この堰状遺構には多くの木器・建築材が使用されている。梯子2点、建築材の柱、二又の柱、板材、杭状木器、三又鉢、平鉢等が多量に出上し、しかもそれらがきれいに組まれていたことである。あまりにも多量の木器・建築材が出上したためにその整理が報告書にまことにあわなかつた。J-11 d 地点は次回の報告書の中で述べることにする。四箇周辺遺跡・四箇遺跡の低湿地にある杭列遺構・堰状遺構は他のどの地域にも未だ発掘されていない連続性のある遺構と微高地にある遺構との関連性を指摘できるものである。

今回は微高地に関する事項を主に取り上げるために J-10 k 地点の調査報告を組み入れた。次回は低湿地における杭列遺構・堰状遺構と微高地の関係について記したいと思っている。

J-10 k 地点は昭和53年度の発掘調査で、J-10 i 地点の西側、J-10 h 地点の東側に位置している。J-10 i 地点の報告で明らかになった微高地の段落ち部分に泥炭層が検出された点と、裾部の遺構のあり方である。また J-10 h 地点から検出された段落ち部分の広がりと遺構の検出が予測できた。調査で明らかになったのは、J-10 i 地点の微高地が J-10 h 地点までつづかず J-10 k 地点で段落ちとなり、旧河川がそこにあったことが判明した。J-10 h 地点にも微高地があり、これは四箇遺跡の方へとつづいている。逆に南側では J-10 k 地点の西側

4 位置と環境

において微高地の段落ちが検出され、試掘調査でも明らかになり、この段落ちがJ-10k地点につづく旧河川である。これによって四箇遺跡、四箇周辺遺跡の中で1つの微高地を確認した。これは疊層を基盤とする扇状地の特有なあり方であろう。つまり疊層は平坦ではなく凹凸の状態で旧地形を形成していたことを物語っている。

この現象は四箇周辺のみではなく早良平野全般に言えることと思われる。近年早良平野の低湿地においても発掘調査が行なわれている。四箇周辺遺跡の北側約1kmの所に西区大字田がある。これは住宅建設によるものであるが、この造成地内に奈良～中世にかけての遺構が認められる。この基盤も疊層で凸凹で内地に遺構が認められる。この遺跡のつづきに高柳遺跡がある。ここは縄文時代後期の遺物や弥生時代の遺構と中世の遺構が認められるが、ここも同様に基盤は疊層で凸凹の激しい部分の凹地に粘土層が堆積してその上に遺構が作られている。西区次郎丸には縄文後期から弥生時代中期の遺構が検出されている。ここも同様で、基盤の疊の上に粘土層がある。この遺跡も削平が著しい。

四箇遺跡・四箇周辺遺跡の南側になると約450mに四箇船石遺跡がある。これは支石墓を中心として弥生時代の中心部である。周辺からは弥生中期斐棺等が出上していることから大遺跡群であることはまちがいないであろう。

この四箇船石遺跡までは450mと狭い範囲の中に四箇周辺遺跡で発見できた微高地が数多く存在するものと思われる。四箇周辺遺跡のような疊層が基盤であるとすれば四箇周辺には数多くの古墳時代の遺構、弥生時代の集落、縄文後期の遺構等が存在し、特に弥生時代と縄文時代後期の集落のあり方や微高地間の連絡、集落の移動性、低地における杭列・堰状遺構の連続性、水田の発見等の問題点が解決されていくことになるであろう。

また早良平野では3つの河川がある。宝見川・金屑川・田村川である。特に宝見川は蛇行に蛇行を重ねた形跡がある。金屑川・田村川にも同様のことが言えるであろう。河川の氾濫は縄文時代～古墳時代にかけて数回認められ小さな微高地を何度もおそった形跡がありありとうかがえる。これらの川にはさまれた微高地における集落のあり方、水田の作り方も問題になってくる。

ごくかぎられた四箇周辺部のみならず東西を川にはさまれた小さな微高地が数多く集まり、その微高地1つ1つに遺構が作られ、その縁辺部には水田地帯を作り出した。四箇周辺遺跡を含む周辺部の遺跡のあり方は早良平野独特のものかもしれない。



第2図 四箇園辺の低湿地遺跡(縮尺 1/25,000)

第3章 調査の記録

1. J-10k 地点の調査

J-10k 地点は、J-10i 地点と J-10h 地点とに挟まれた地点で、J-10i 地点の微高地の一部と J-10h 地点の微高地からの段落ち部分が検出され、J-10i 地点で確認されている泥炭層が、四箇 A 地点の三日月状の凹地同様の形態をとる可能性も考えられた。しかしながら人工的な造構はまったく認められず、基盤となる礫層に凹凸があり、この凹地に自然の流れによる遺物の堆積が認められ、遺物自体もローリングを受けているものが主である。ただ J-10h 地点の微高地の裾を流れる自然の溝（河川）のつづきが認められ、また J-10i 地点の微高地も J-10k 地点ではしだいに傾斜していき、凹地の裾部であることが確認された。自然の溝は南側では狭く、中央部で J-10h 地点へつづくものと、四箇 A 地点へつづく 2 つの流れがある。J-10h 地点の中央部の凹地は、J-10l 地点の西側微高地の裾部につづくことが判明した。

1) 土 層

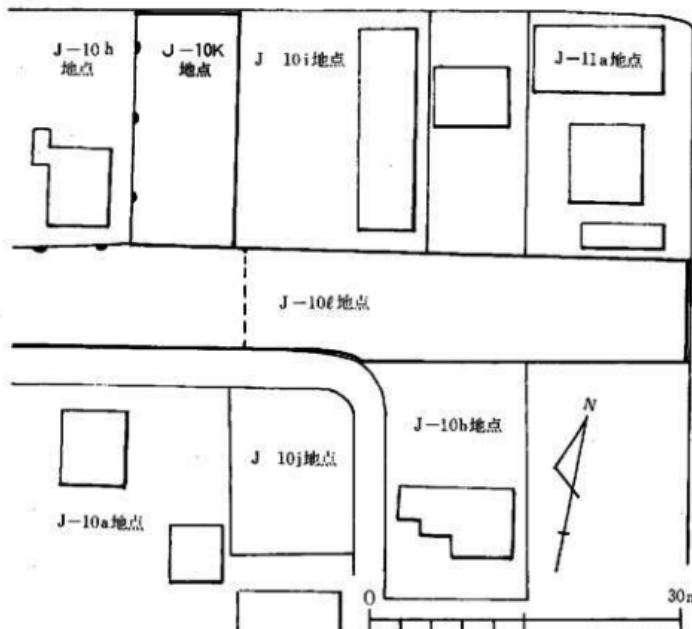
第 5 図に示したように礫層を基盤とし、その礫層も凹凸が認められその部分に砂層や青灰色シルト層が堆積する。部分的に、特に北西部では砂礫層が厚く堆積している。J-10i 地点で検出された泥炭層は東側の壁でわずかに観察されたが部分的で全体に広がるものではなかった。全体的に砂粒を多く含み、砂層が多いことから自然の河川の可能性が高い。

2) 出土遺物

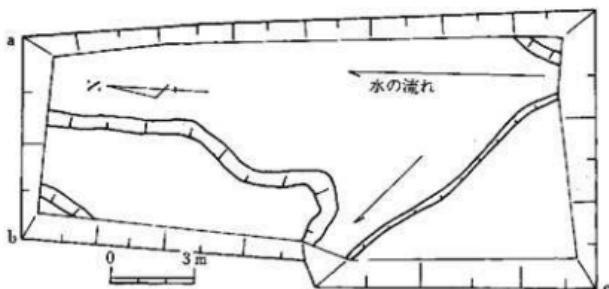
J-10k 地点から出土した遺物は、表土中のものを除くと砂層から出土したものがほとんどで、いずれも流れ込みと考えられる。出土した土器や石器は縄文時代から古墳時代に及んでいるが、大部分はローリングの為磨滅している小片で図示したのは少数である。

1 は粗製の深鉢形土器の口縁部で、器面の内外を地文の条痕の上からナデ調整が施されているが、粗雑で器面に凹凸がめだつ。胎土は砂粒を含み、焼成は普通で、内外ともに淡茶褐色。2 は山形口縁をもつ精製の鉢形土器片で、口唇部と肩部との間に押圧した擬似縞文を施してその文様帶に 2 本の沈線をめぐらせ、沈線の間を X 字文で区切っている。胎土は砂粒・雲母を含んで、内外ともに暗褐色を呈し焼成は普通である。3 の焼成は普通で内外ともに暗褐色を呈し、縄文・沈線文を施した精製土器の胴部片である。器面は内外ともによく研磨されている。4 は端部に丸みをもつ粗製土器の底部で、外面とともに淡褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含んでいる。外面はナデ調整だが粗雑な仕上げで、内面は磨滅が著しい。5・6 は端部に丸みをも

四箇道跡



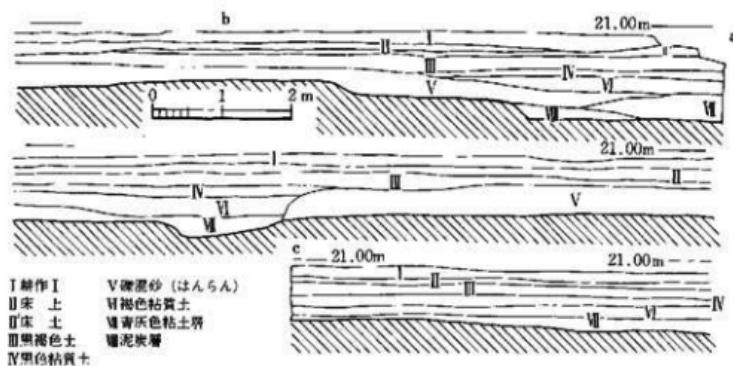
第3図 J-10k 地点位置図 (縮尺 1/625)



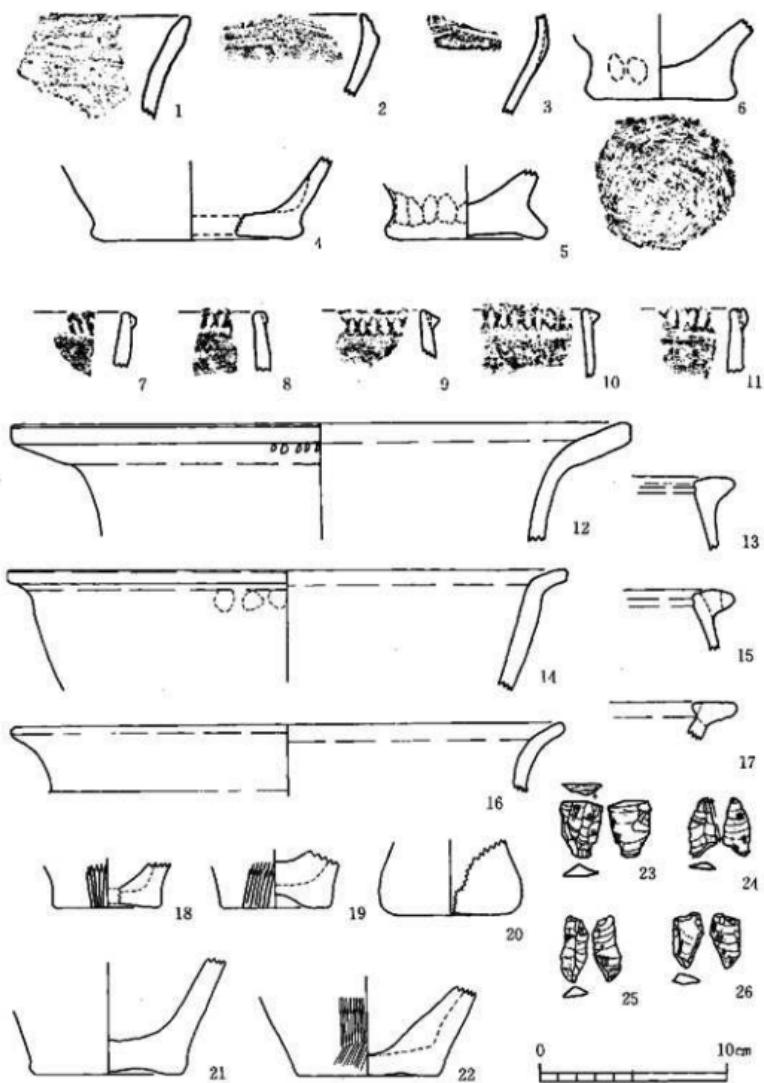
第4図 J-10k 地点平面図 (縮尺 1/200)

8 J-10k 地点の調査

つ粗製土器の底部で、5は中央部がやや上げ底となり、胎土に砂粒を多く含む。6は底面に条痕を施したもので、胎土は4と同様に砂粒が多い。ともに淡褐色を呈し、外面はナデ調整後にまわりを指でおさえている為に指頭の痕が明瞭に残る。7~11は夜臼式土器と考えられる變形土器の口辺部であるが、ローリングのためいずれも小片である。7・9は刻み目凸帯がII線部よりやや下がり、他は口縁端とほぼ同高。7は右下がり、8は左下がりの刻み目で、9の凸帯は、きわだって突出する。12大きく外反する變形土器の口縁部で、浅い刻み目をもつ。器壁の調整は押圧後にヘラによるナデが加えられている。13・15・17は胎土に砂粒を多く含み、淡黒褐色を呈している。13・15は胴部外面にハケ目、内面はナデ調整である。やや丸みをもつ口縁部で内面端部に棱をもつ。17のII線上面は平坦面をなし、両端とも丸みをもち、内側に突出する。14は小さく外反する口縁部で、内外面ともにヘラによるナデ調整。胎土は僅かに砂粒が含まれる。16はやや外反しながら伸びる口縁部で、端部は丸みをもつ。胎土は多量の砂粒を含む。内外面ともにヘラにてナデ調整。18・19・21・22は變形土器の底部である。18・21はわずかに上げ底、19は上げ底の顕著なものである。いずれも外面は押圧後ハケ目調整がなされている。22は厚手で平底に近く、外面は押圧後ハケ目調整。内面には炭化物が付着するが、極度のローリングのため磨滅が著しい。18・19・21は内面に炭化物が付着する。23~26は刃器で、23は一部に自然面を残したやや厚手の剝片で剥離は上下二方向からなされている。打面側は折断されている。24・25は不純物の混じる黒曜石を素材にし僅かに側辺部には使用痕が認められる。24は打面が残るが、25の打面は剥離によって除去されている。26は不純物の混じる黒曜石を素材として片面の片側に刃部形成のための剥離をおこなっている。打面部は剥離によって除去するが、バルバー・スカーフは残している。



第5図 J-10k 地点土層断面図 (縮尺 1/80)

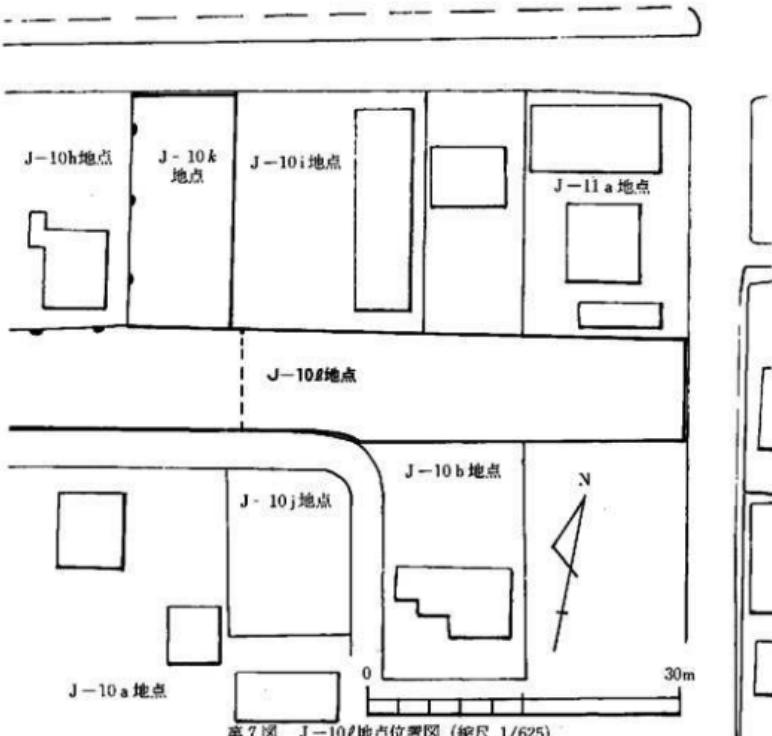


第6図 J-10k 地点出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

10 J-10ℓ 地点の調査

2. J-10ℓ 地点の調査

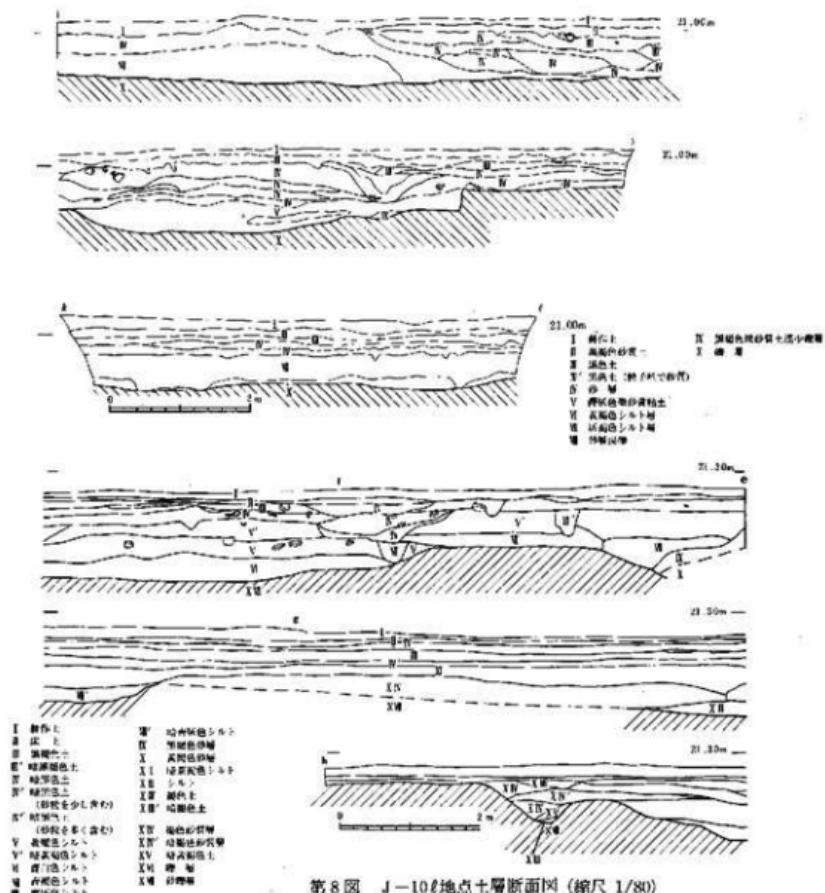
J-10ℓ 地点は、第 7 図に示したように東西に長く、全体で 1,043m² である。宅地造成工事計画に先行して試掘を行なった。その結果、西側 503 m² の部分には、黒色土と砂層との重複で、基盤と考えられた砂礫層まで地表下 0.6m しかなく遺構の検出は認められなかった。東側半分は J-10i 地点、J-11a 地点、J-10k 地点の隣接地であり、四箇遺跡 A 地点からつづく微高地と予測でき、遺構も J-10i 地点、J-11a 地点と同様な遺構と考えられたため住宅建設計画より先行して発掘調査を実施した。検出された遺構は予測されたもののほかに、古墳時代の溝状遺構と石蓋土塗、弥生中期の豪棺墓 8 基と土塙 2 基、台地を切断する溝状遺構、縄文時代前期の轟式土器、曾畠式土器の包含層とともに Pit と不整形竪穴を検出した。調査区の西側は微高地の段落ちが認められこれが J-10k 地点の大きな溝状遺構へとつなぐことが判明した。



第 7 図 J-10ℓ 地点位置図 (縮尺 1/625)

1) 土 層

土層の堆積状態を観察すると礫層を基盤とし直上に砂層及び砂礫層が約50cmある。凹地には青白色シルト層・礫層・砂層と部分的に異なりを示す。次に砂礫層が凹凸状態で堆積する。この凹地の部分に暗黄褐色シルト層・黄褐色シルト層が堆積し、この層位が、縄文前期・後期の遺構面となる。凸地の部分には直接住人時代・縄文後期の遺構面であったり、この上にもう1枚砂礫層が堆積している場合がある。この状態は、隣接地であるJ-10 i 地点でもまったく同



第8図 J-10e地点土層断面図(縮尺 1/80)

12 J-10 e 地点の調査・古墳時代の遺構

様の様相を示している。斐棺の出土状態から考えて、表面は約50cm以上の削平が行なわれていることを物語っている。現存する遺構は床(底)面に近い部分が残っていると考えられる。これはJ-10 i 地点でも四箇遺跡A地点でも同様である。このことから凸地の削平を受けた部分にも数多くの遺構が存在していたと思われる。東側（第8図のC～Dの部分）の土層を観察するとCからDにかけて砂層の堆積が主流をしめ、水の流れがあったことを物語っている。この部分は、溝状遺構（M-1）と呼んだものであるが、J-11 a 地点でも認められた河川につながるもので、これが四箇遺跡B地点へとつながると考えられる。このM-1は微高地と微高地を切断するもので、四箇遺跡B地点への広がり方からすれば人工の溝とは考えにくいが、J-11 a 地点の狭い溝幅及びJ-10 e 地点の南側の溝幅からすると部分的に人の手が加わったとも考えられる。eからfの部分は微高地上であり、部分的に砂層が認められるがこれは氾濫によるもので他の層位は整然としている。ちなみに礫層の標高は、西側の部分で19.80m、凸地で20.80mである。ここで1mの比高がある。M-1の部分では、20.00mで、東側では20.30mとしだいに上がっていく。

西側の微高地はJ-10 i 地点へとつづき、段落ちした裾の部分はJ-10 h 地点へとつづく。この部分から西側は標高19.50mまで礫層が下り大きな河川となり、次に対岸の礫層がしだいに上り地表下0.6m（標高20.40m）で平坦面をつくりながら西側へとつづく。

南側はJ-10 j 地点、J-10 b 地点の試掘調査、道路新設工事で微高地の裾部が確認できている。J-10 e 地点の西側部分の微高地の裾はやや丸みを持ちながらJ-10 j 地点へとつづき、Uの字を描きながらJ-10 e 地点のM-1の微高地へとつづく。J-10 j 地点、J-10 b 地点からは遺構はまったく認められず礫層がしだいに下っていく形状を示していた。

2) 古墳時代の遺構

遺構としては溝状遺構（M-4～6）しか検出されなかった。これは旧地表面まで約50cm以上の削平が考えられ、残存する溝状遺構も底面しか検出されていない。遺物ではM-1の砂層から須恵器の高台付壺（第10図27）が1点出土しただけで他はすべて土師器である。

a) 溝

M-4の溝状遺構は1～4号斐棺墓を切断し、北西から南東に延び南東側で二つに分れる。溝幅は0.5～0.6mを測り、深さは約0.12mと浅い。この溝からは土師器の小片と高壺の脚部（第10図18）が出土している。M-5は2号と3号斐棺墓の中間部を通り5号斐棺の主軸を切断しながら南北に伸びる。南側でM-4に流れ込む。溝幅0.6m、深さは0.1mを測り浅い。この2本の溝の土層は黒色砂質土である。M-6は弥生時代の溝（M-2）の上部に位置し、平面では弥生の溝と重複しているため検出が難しく土層断面（第11図）でその規模が明かになった。溝幅1.3m、深さ0.18m。遺物は斐・壺・高壺等の出土がある（第9・10図）。

b) 出土遺物 (第9・10図, PL. 11)

壺形土器 (1~7) 壺形土器は複合口縁のもの (1・2), 直口する単口縁のもの (3~7) に大別される。1は口縁部上面が平坦で口径19.6cm。2はやや内傾し口径24.2cm。調整は内外面とも丁寧なヨコナデでM-2より出土。単口縁の壺はさらに口縁部がわずかに外反ぎのもの (3・4・7), 端部がわずかに内傾するもの (5・6) とに区分される。口径は3が18.6cm, 4が15.0cm, 7は14.3cm。内外面とも刷毛目調整。4は球形の大きく膨らむ胴部がつく。5は口径が11.8cm, 6が11.5cmの小形のものである。口頭部は内外面とも刷毛目調整であるが, 6の外面はヨコナデで仕上げ, その上に炭様の黒色顔料で縦に施文している。3はM-1, 4~7はM-2上層に認められた古墳時代の溝状遺構より出土。

変形土器 (8~17) 8~15は広義の所謂「く」字状口縁を有するものであるが, 口縁部の形状から, 直線的に緩く外反するもの (8~11), わずかに膨らみをもって外反するもの (12), 反りぎみに外方に開くもの (13~15) に区分される。8~11は屈曲部内面に緩い稜を有し, 口径は8が13.2cm, 9が19.6cm, 10が14cm, 11が22cmで, 口径の大小により更に2区分できよう。内外面とも刷毛目調整。10は外面に煤が付着している。12は口径19.2cmで球形の胴部がつく。口縁端部は上方につまみあげられて稜がつき, 所謂「庄内式」変形土器に類する特徴をもつ。口縁部内外はヨコナデ, 内面はヘラ削り。口頭部には煤が付着している。13~15は口縁が反りぎみに外方に開き, 胴部は余り張らない。11径は13が13.6cm, 14が16.2cm, 15が14cmと小形である。15の胴部下半はタタキ後にナデ・ヘラ削りで仕上げている。16は胴部最大径18cm。球形の胴部上半が刷毛目, 下半はナデ, 11頭部はヨコナデ仕上げ。17はM-2上層出土。

高 坯 (18) M-2上層出土の脚柱状部資料。脚部は細く, 徐々に幅広がりとなる。坯部はナデ。脚部外面は刷毛目, 内面は絞り痕が上面にみられ, 下半はヨコナデ。淡明褐色。

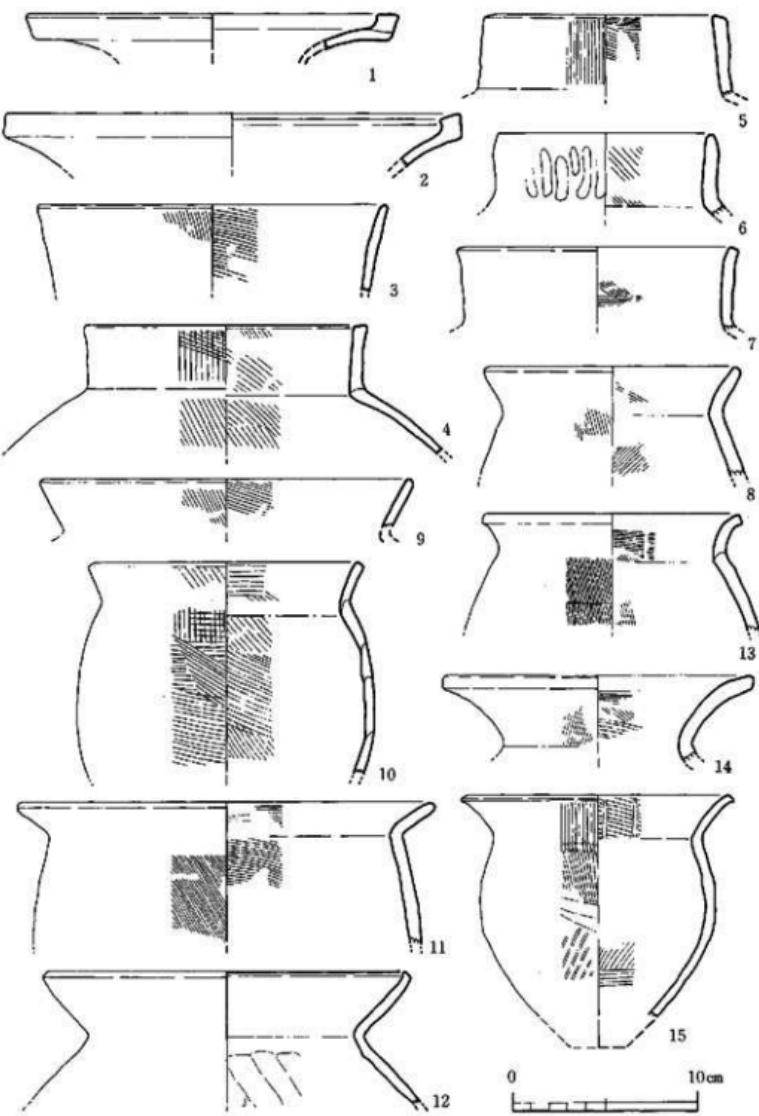
手捏土器 (19) 口径7.0cm。口縁部はゆるく外反して端部を丸くおさめ, 胴部は余り張らない。口縁部内外はヨコナデ, 胴部は多くの指頭押圧痕を顯著に残す。色調は淡褐色。

壺形土器 (20) 口径9.6cm, 器高4.3cm。口縁部は内弯ぎみに立ち上がり, 端部はわずかに内傾する。内外面ともナデで仕上げ, 口縁下には押圧痕が残る。胎土に砂粒を含み, 暗褐色。

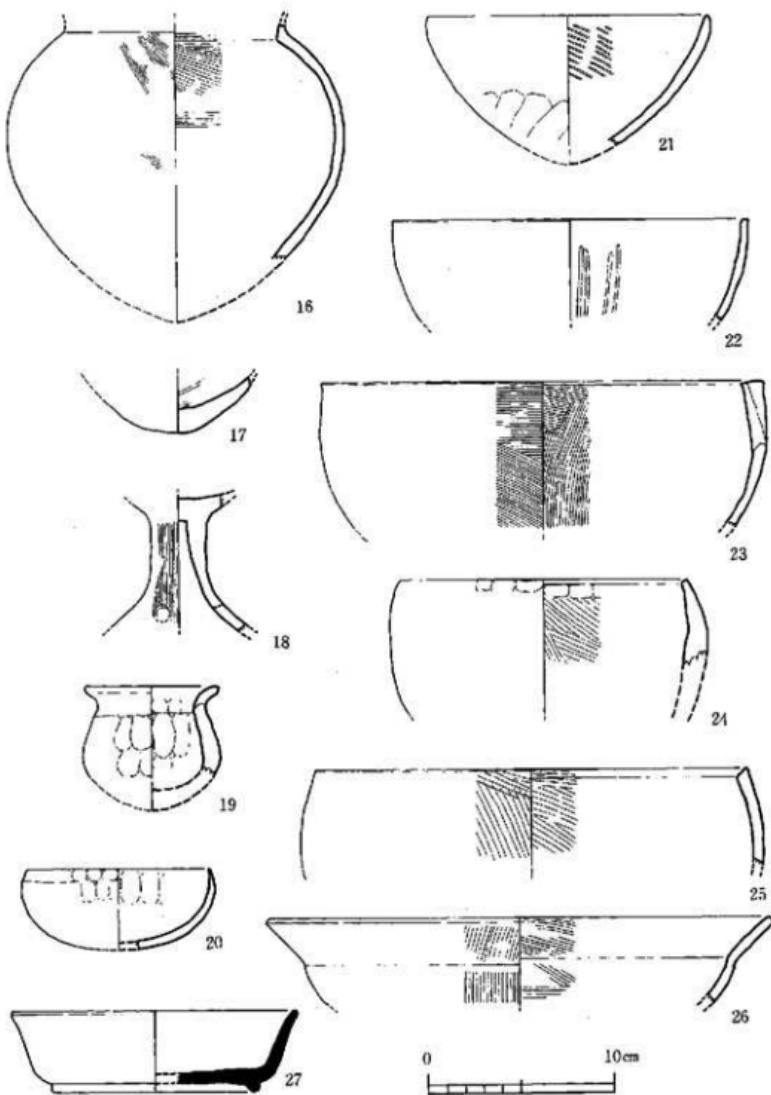
鉢形土器 (21~26) 単口縁のもの (21~25), 「く」字状に外反するもの (26) に大別され, 更に単口縁の鉢は, 内弯ぎみに外反するもの (21・22), 口縁下で緩く屈曲して内傾するもの (23~25) に区分される。21は口径15cmの小形の鉢で, 内面上半にタタキ様の痕跡を残す。22は口径19cm。内面に暗文風のヘラ書きが縦方向に残る。23~25は内傾する口唇部を平坦に仕上げ, 緩い稜を作る。21径は23が23.8cm, 24が15.4cm, 25が23cm。26は「く」字状口縁の浅い鉢で, 暗茶褐色を呈す。22はM-1, 23~25はM-2上面溝状遺構より出土。

高台付坯 (27) 口径15cm, 底径10.8cm, 器高4.3cm。底部と体部の境は丸味をもつ。

14 J-10地点の調査



第9図 土師畠実測図 (1) (縮尺 1/3)



第10図 土器・須恵器実測図-(2) (縮尺 1/3)

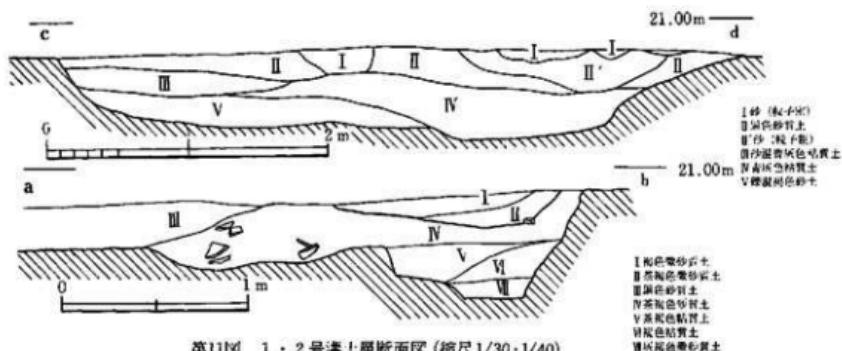
3) 弥生時代の遺構

付図-1で示すごとく弥生時代の遺構は溝状遺構が4条（4条の内1条は、旧河川の可能性を持つ），甕棺墓が8基，土塙が2基，Pit 20基，石蓋土塙（？）1基を検出した。遺構は東側より西側の半分に集中しており，特にM-2は微高地の裾付近を巡るよう，また甕棺墓を囲むような位置を示している。

a) 溝（第11・12図，付図）

M-2はJ-10*i*地点でもM-2として報告（四箇周辺遺跡（2）P.22）されているもので，やはり微高地の裾付近を巡るようにつづいていることから，このM-2はほぼ微高地の裾を巡る溝と考えてよい。M-2の溝幅は南側で，約1.7m，深さ0.6m，中央部で2.5m，深さ0.6m，北側断面では1.9m，深さ0.55mを測る。微高地の標高は20.85m，溝底面の標高は20.30mである。溝の中間部で段を持ち，二つの溝が1つになった感もある。遺物は多量に出土している。第21図4-17，第22図18・20～22・27～32・34～36がある。削平を受けているのでM-2の規模を想定すると幅が約2.5～3m，深さが1.0～1.2m程度と考えられる。このM-2の底面は，縄文後期，前期の包含層の一部まで達しており，下層底面には前期の遺物が底面から出土している。M-2の溝に流れ込むようにM-3がある。この溝は，幅が0.35m，深さ0.2mで非常に浅く，微高地標高20.85m，溝底面標高20.65mである。

M-1は北側のJ-11a地点から四箇B地点，四箇C地点への杭列遺構へとつなぎ，南側はJ-10b地点からJ-10j地点へとつなぐ溝状遺構である。M-1は微高地を切断するように形成されており，溝幅等から人工的に作られた溝か，もしくは自然の氾濫によって形成されたものかは定かではないが，J-11a地点の溝の状態，及びM-1の右岸で杭列が2列になって



第11図 1・2号溝上層断面図 (縮尺1/30・1/40)

打ち込まれている状態、及び溝内にも杭列が認められるところから、部分的に人工の手が加わった溝として考えておきたい。遺物は上部砂層から須恵器（第10図27）、土師器（第9・10図1～26）が、下層砂層から弥生土器（第21・22・23図）が出土している。溝幅は狭い所で4.2m、最大部分8.0mを測り、深さは南側が若干高く標高20.438m、微高地との比高差は0.37mである。北側は、標高20.375mで微高地との比高差は0.36mである。M-1に流れ込むようにM-6がある。M-6はほぼ東西に延びており、東側への微高地へとつなぐと思われる。溝幅は1.20m、深さ0.11mで溝底面標高は20.57mである。出土遺物はない。しかしながらM-1上にはM-6が延びている形跡はなく、M-1に付随する溝と考えられる。

b) 妻棺墓（第12・14～16図）

四箇遺跡・四箇周辺遺跡群の中で弥生時代の溝、住居址、杭列造構等の遺構は数多く検出されているが、妻棺墓はJ-10地点で発掘調査されたものが最初である。妻棺墓は8基検出された中で、成人用妻棺墓は1・4・5・6・7号妻棺墓の計5基、小児用妻棺墓は2・3・8号妻棺墓の計3基であった。この内单棺が4号、7号（？）の2基で、接口が5基、不明1基である。また、これらの妻棺墓の中で6・7号だけが切り合い関係を持つ。特に今回の調査で四箇遺跡A・B地点からつなぐ微高地が明確となり、その中に溝、住居址、妻棺、杭列造構と一つの集落単位の必要な条件が揃ったことになった。その意味で妻棺墓の検出は重視される。

1号妻棺墓（第12～14図）

半壊されてはいるが、妻十妻の接I式の成人用妻棺墓である。主軸はN-23°-Eである。埋置角度は3°を指す。ほぼ平行に埋設されている。墓塚は細長い橢円形を示し、長軸2.05m、短軸0.83mを測る。墓塚底面は標高20.49mを測る。接合部には粘土を巻きついている。下妻から円盤状土製品とボタン状土製品が副葬されている。（第13図1・2）ボタン状土製品は中央部に鏡の紐に似た形状を作り出している。2.20cmのほぼ円形で厚さ1.10cmを測る。

2号妻棺墓（第12・14図）

半壊しているが、鉢十妻の接II式小児妻棺墓である。上妻の鉢は口縁部付近しか残っていない。主軸はS-25°-Eで、埋置角度は24°を指す。墓塚は不整円形であり、長軸0.8m、短軸0.57mを測る。墓塚底面の標高は20.67mである。

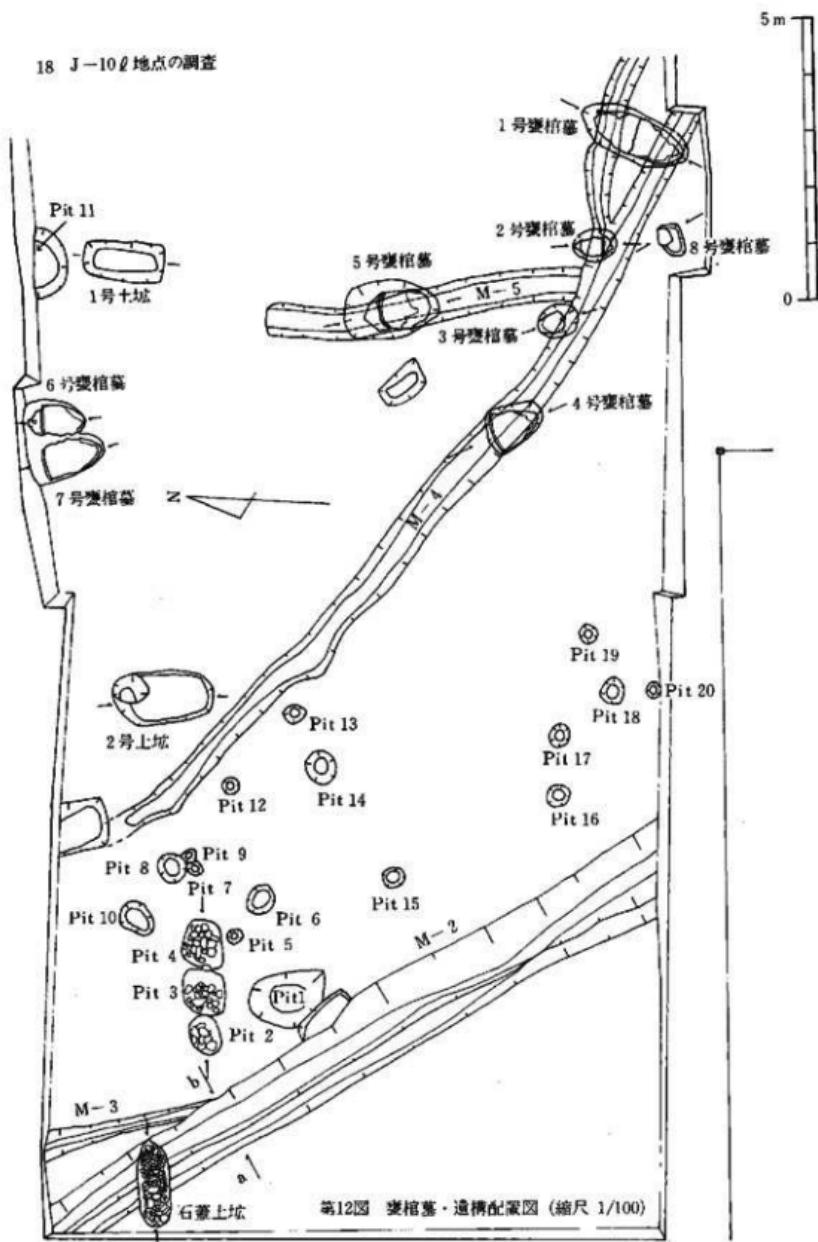
3号妻棺墓（第12・14図）

3号も2号と同様に半壊し上妻はほとんど下妻の中に混入していた。妻十妻の接II式小児妻棺墓で、主軸をS-20°-Eの方向にとる。埋置角度は18°である。残存する墓塚の形状はやや円形に近い。墓塚底面の標高は20.59mである。墓塚の長軸は0.76m、短軸は0.61mである。

4号妻棺墓（第12・15図）

大型妻の单棺である。II縁部付近に木片（？）を含んだ粘土目貼りと、土塙部底面に凹みがあ

18 J-10地点の調査



第12図 墓棺墓・遺構配図 (縮尺 1/100)

るところから木蓋单棺の可能性が強い。主軸はN-25°-Wにとり、埋置角度は8°を指す。墓塚は不整橢円形を呈する。墓塚底面の標高は20.54mを測る。墓塚の長軸は1.1m、短軸は0.82m。

5号甕棺墓 (第12・15図)

鉢と甕との組合せによる覆口式成人用甕棺である。主軸をN-10.5°-Wにとり埋置角度は25°を指す。覆口の口縁部付近に厚く白色粘土の目貼りを施す。墓塚の形状は橢円形を呈する。墓塚底面の標高は20.38mで8基の中で1番深く埋葬してある。墓塚の長軸は1.70m、短軸1.05mを測る。

6号甕棺墓 (第12・16図)

7号甕棺墓と切り合っている。その前後関係は掘り方が浅いため不明である。鉢と甕の接口式成人用甕棺墓で、主軸はN-5.5°-Wをとり、埋置角度は23.5°を指す。墓塚は橢円形と思われる。墓塚底面の標高は21.07m、墓塚の長軸は $1.1m + \alpha$ 、短軸 $0.7m + \alpha$ である。

7号甕棺墓 (第12・16図)

大型甕の单棺(?)と思われる。上部に土器片が3片ほどあることや削平が著しいため定かではないが接口の可能性もある。主軸をN-8°-Wにとり、埋置角度は27°である。副葬品として石劍の破片が出土したが、盗難にあい、図示することができなかった。墓塚底面の標高は21.04m。長軸は $1.4m + \alpha$ 、短軸は0.7mを測る。

8号甕棺墓 (第12・15図)

壺形土器の胸部しか残存していないので不明であるが、恐らく壺の小児用单棺墓であろう。主軸はS-22°-Eと思われ、埋置角度は約6°であろう。墓塚は橢円形である。墓塚底面の標高は20.80mで、墓塚の長軸は0.63m、短軸0.44mである。

c) 土塚・Pit群と時期不明の石蓋土塚

土塚 (第12・16図)

発掘区の北側中央部に1号土塚、それより西側M-4の近くに2号土塚が検出された。1号土塚は長方形の形状を示す。長軸1.42m、短軸0.66m、深さ0.12m、土塚底面の標高20.507mを測る。2号土塚は橢円形に近い形状を示す。長軸1.80m、短軸0.97m、深さ0.1m、土塚底面の標高20.737mである。

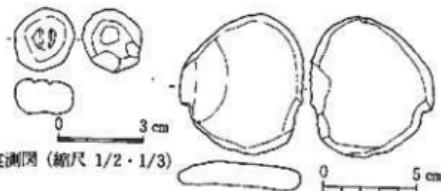
Pit群 (第12・17図)

弥生時代のPitは総数20ある。最も大きなものはPit 1の $1.30 \times 1.0 \times 0.14m$ で石を底面に配している。他にもPit 2~4(第17図2)に同様の石を配したものがある。Pitの総数、配列でまとまるものはないがPit 5・8・12・13の配列は建物の配列(1.5m間隔)を彷彿させる。旧地表面が削平されているため、建物・住居址等は削平されたものであろうし、Pit自身も浅い。

時期不明の石蓋土塚 (第12・17図)

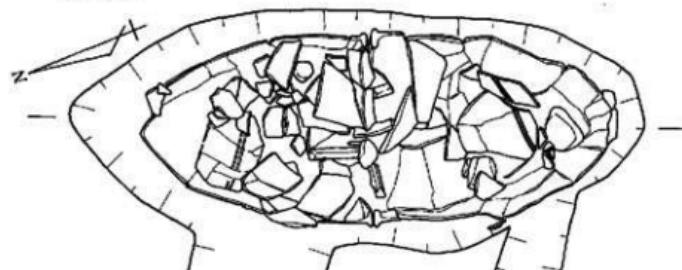
第17図1に図示した長橢円形の平面プランで長軸1.55m、短軸0.53m、深さ0.65mで、床面標高

20 J-10地点の調査

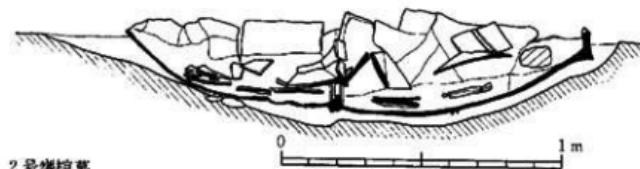


第13図 第1号墓内出土遺物実測図 (縮尺 1/2・1/3)

1号墓



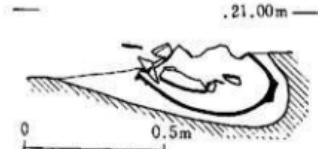
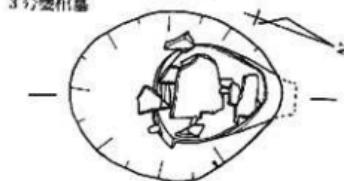
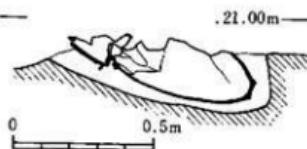
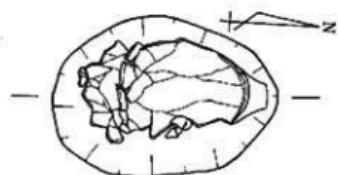
21.00m



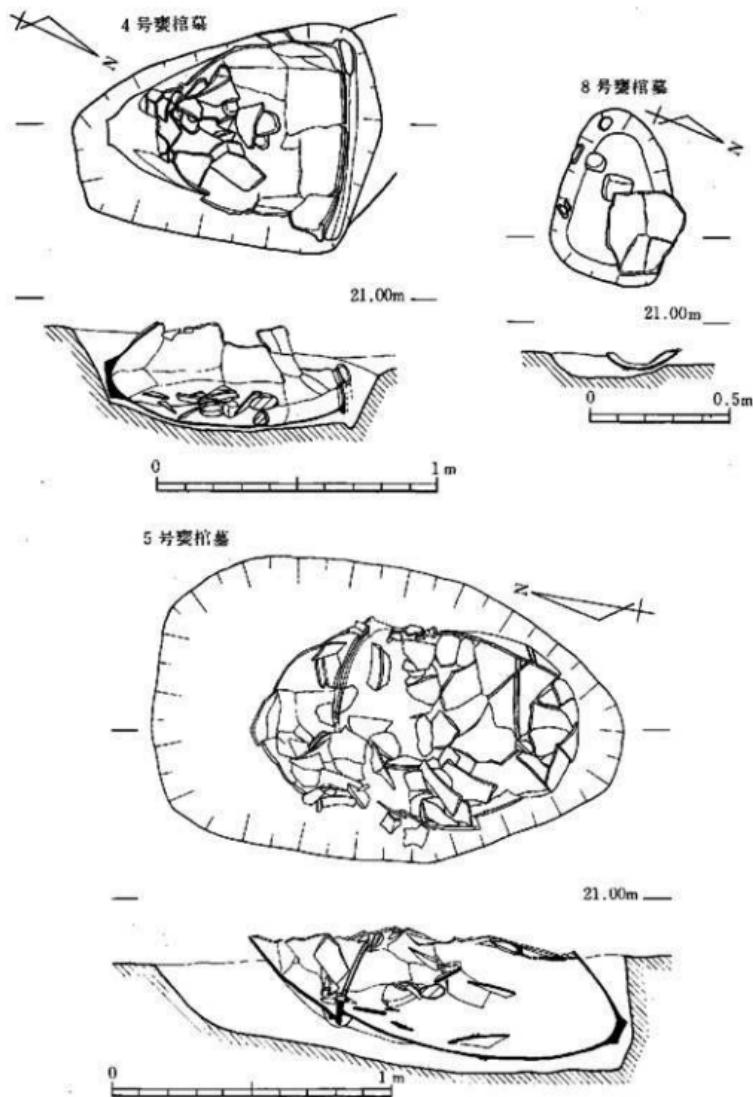
2号墓

0 1 m

3号墓

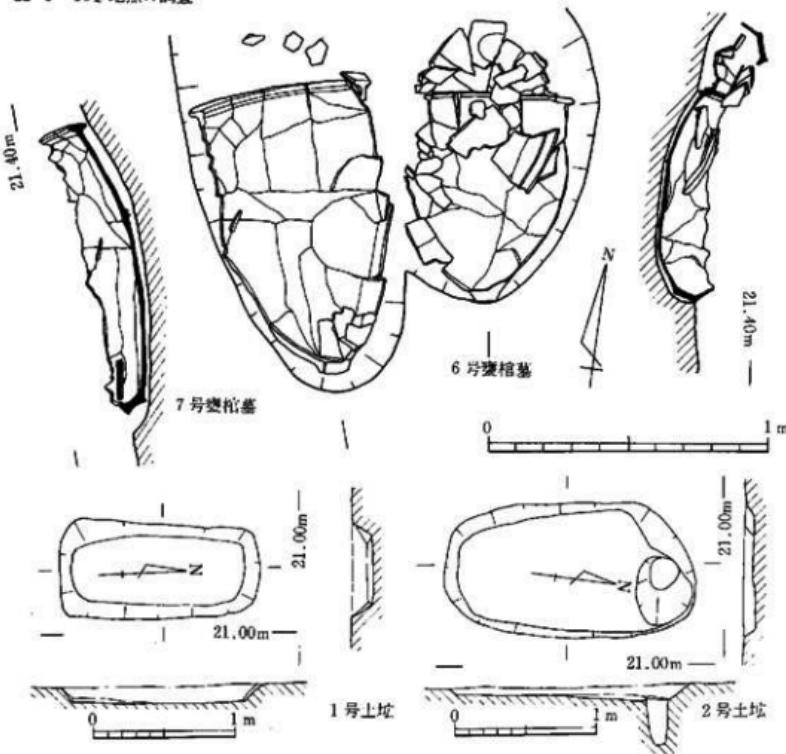


第14図 1・2・3号墓実測図 (縮尺 1/20)



第15図 4・5・8号墓群実測図 (縮尺 1/20)

22 J-10地点の調査



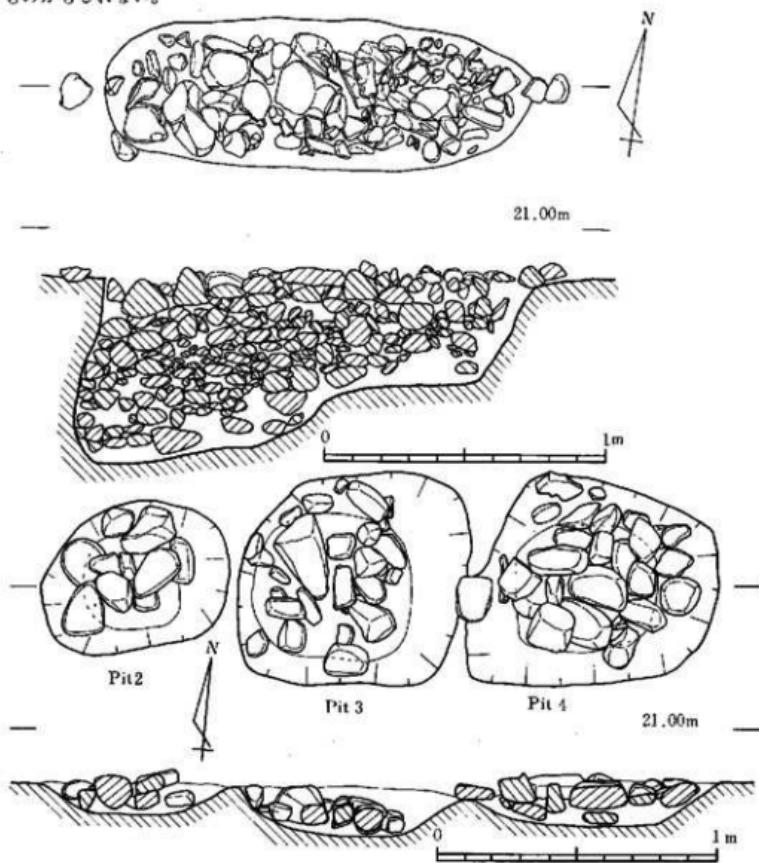
第16図 6・7号墳・土塚実測図 (縮尺1/20・1/40)

表-2 古墳・弥生時代の土塚・Pit計測表

(単位:cm)

Pit番号	縦	横	深さ	形状	概要	Pit番号	縦	横	深さ	形状	概要
1	130	100	14	不整形	石を配する	11	130	65	23	円形?	半分未掘
2	65	51	11	*	*	12	30	32	14	円形	
3	80	73	17	*	*	13	38	30	7	楕円	
4	85	73	20	*	*	14	54	56	9	円形	
5	24	28	19	楕円		15	34	40	7	楕円	
6	52	44	24	*		16	38	34	5	円形	
7	20	30	11	*		17	34	32	7	*	
8	44	50	41	円形		18	44	42	5	*	
9	20	24	13	楕円		19	32	30	7	*	
10	50	67	22	*		20	28	24	4	*	

は20.16mを測る。西側は内側に掘り込みが認められ、床面では約11cm内に入る。東側は約30度の傾斜を持って掘り込む。土坑内には20cm大から拳大の大きさの花崗岩の自然石が全面に敷きつまつた状態で検出された。この土壇は弥生時代中期の溝（M-2）を切り、縄文時代後期・前期の包含層まで達している。出土遺物は第22図33と縄文時代前期の土器第28図6であるが、土壇の時期を決定するものではない。むしろ古墳時代の溝を切っていることからそれより新しい時期であろう。Pitにも自然石を配するものが4つほどあるが、これも土壇と同時期を示すものかもしれない。



第17図 石蓋土壇・Pit実測図 (縮尺1/20)

d) 出土遺物

(1) 麟 棺

1号麟棺 (第18図, PL. 12)

上斐は底部を欠く大形の菱形土器で、口径63.6cmを測る。平坦な「T」字状の口縁部はわずかに内傾し、緩い膨らみをもって胴中央部に巡る2条の三角凸帯へつづく。調整はヨコナデ・ナデで仕上げられ、また、口縁下から凸帯下にかけては炭様の黒色顔料が塗布されている。

下斐は口径60.8cm、器高87.4cmを測る大形の菱形土器。内唇の肥厚する「T」字状口縁を有し、胴中央部に複合山形凸帯を巡らす。砲弾形の胴部は口縁直下で厚くなり、直線的に立ち上がる。口縁部と凸帯部がヨコナデの他はナデ仕上げ。胎土・焼成は良好。色調は淡黄褐色。

2号麟棺 (第19図, PL. 12)

上斐は底部を欠く鉢形上器で、口径35.0cm。逆「L」字状の口縁部直下に両側より抓み上げて作ったシャープな三角凸帯を1条巡らす。胴部上半には炭様の黒色顔料が観察される。

下斐は逆「L」字状の口縁部を有し、端部に刻み目を付けている。口縁下には相接した2条の三角凸帯が巡り、胴部上半で最大径36.0cmを測る。口縁部と凸帯部はヨコナデ、内面はナデ、外面は下から上に粗い刷毛目調整。胴部には炭様の黒色顔料がわずかに観察される。

3号麟棺 (第19図, PL. 12)

上斐は口径35.0cm、器高34.3cmを測る。胴部は逆「L」字状を呈する口縁部直下で緩く屈曲して膨らむ。胴部中位に両側より抓み上げて作った三角凸帯を1条巡らす。

下斐は口縁部がわずかに内傾した逆「L」字状を呈し、その直下に1条の三角凸帯が巡る。胴部は余り膨らまずに底部へつづき、口縁下で器壁の厚みを増す。外面は粗い刷毛目を施す。

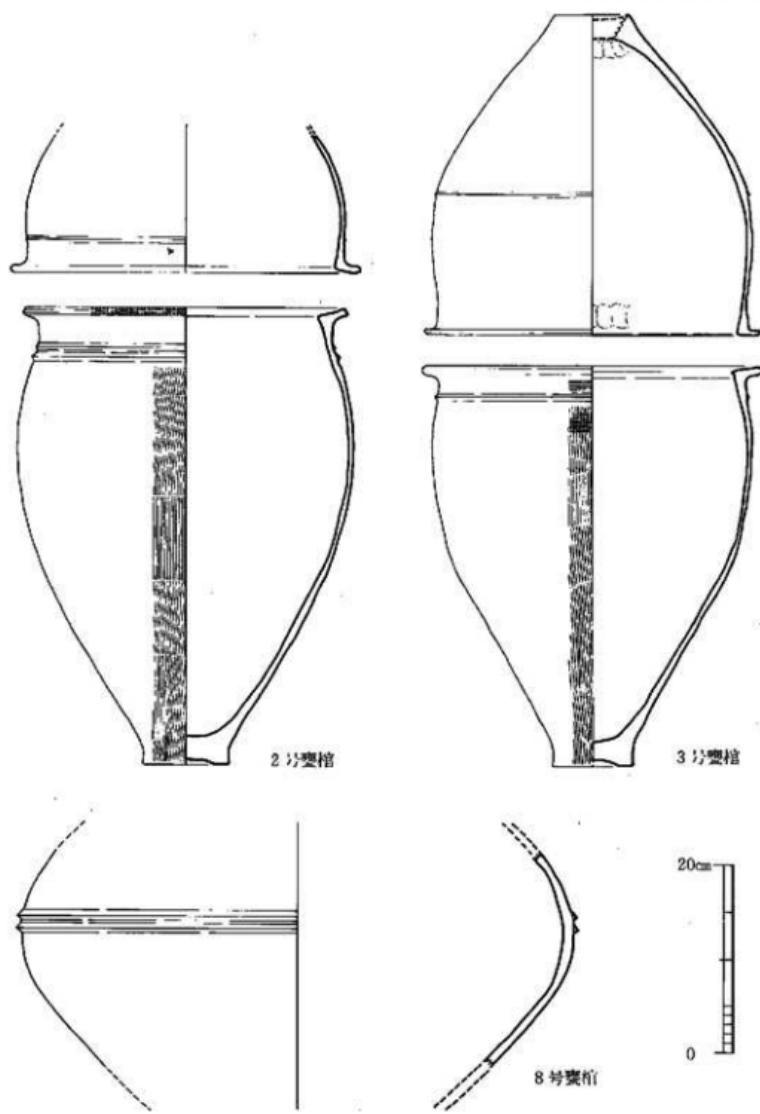
4号麟棺 (第20図, PL. 12)

口径67.6cm、器高80.6cmを測り、砲弾状を呈する大形の菱形土器である。「T」字状の口縁部はゆるく内傾し、胴中央部やや上に1条の三角凸帯が巡る。胴部は口縁下でわずかに膨らみ、ゆるやかに径を絞じながら底部へ移行するスマートな器形である。調整は口縁部・凸帯部がヨコナデの他はナデ仕上げ。また、胴部上半には炭様の黒色顔料が観察され、恐らくは、全面に塗布されていたと思われる。胎土に石英砂を多く含み、焼成は良好。淡黄褐色を呈す。

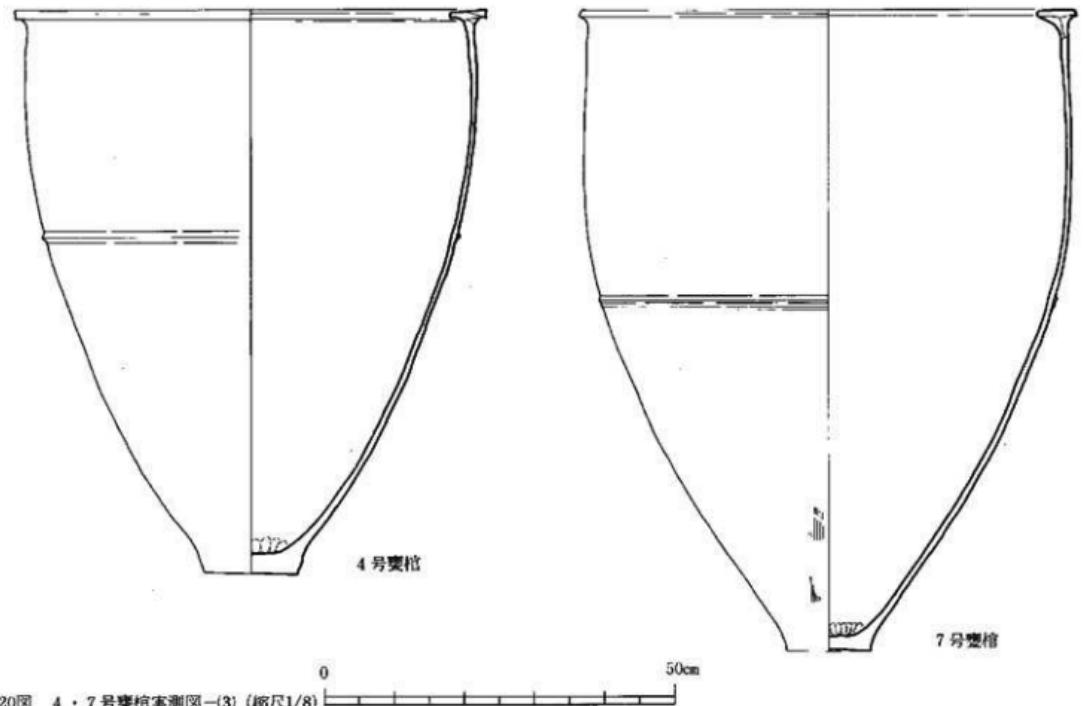
5号麟棺 (第18図, PL. 12)

上斐は底部を欠く鉢形土器で口径64.2cm。逆「L」字状の口縁部は僅かに内傾し、その直下に貼付けの三角凸帯が1条巡る。胴部はわずかに膨らんで底部へつづく。口縁部と凸帯部はヨコナデ、内面はナデ、外面は刷毛目調整。外面には炭様の黒色顔料がわずかに観察される。

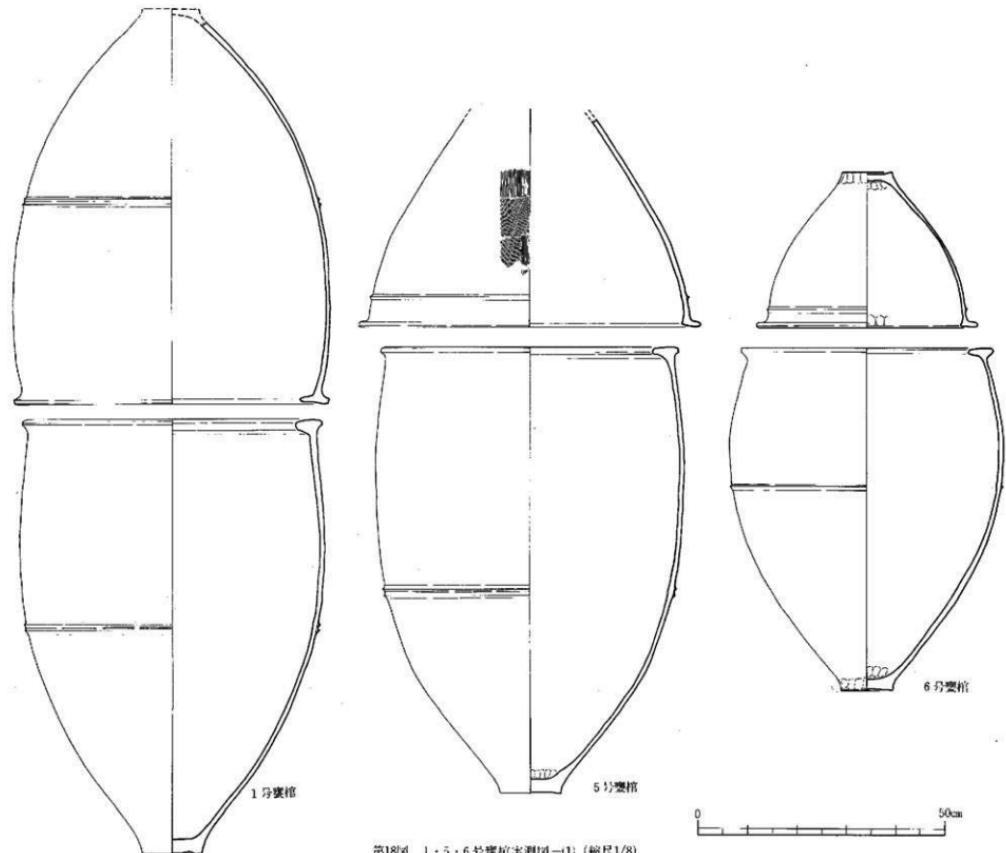
下斐は口径60.1cm、器高89.2cm。平坦な「T」字状の口縁部は口唇が肥厚し、端部はナデにより凹む。胴部中央やや下位には相接する三角凸帯が2条巡り、緩やかな膨らみをもって直線



第19図 2・3・8号麥棺実測図一(2) (縮尺1/6)



第20図 4・7号棟実測図(3) (縮尺1/8)



第18图 1·5·6号型棺形图(1) (缩尺1/8)

的に口縁部へつづく。1号壺に近似する形である。調整はナデ・ヨコナデで仕上げている。

6号壺（第18図、PL. 12）

上部は口縁部が逆「L」字状を呈する鉢形土器で、口径44.0cm、器高31.4cmを測る。口縁直下には1条の三角凸帯を附付け、若干膨らみぎみに底部へつづく。

下部は内側に突出する「T」字状の口縁を有する。頸部は内傾し、胴中央部に巡らす1条のシャープな三角凸帯につながる。最大径は胴上半部にあり、全体的に丸味のある壺である。

口縁部と凸帯部がヨコナデの他はナデ仕上げ。口径50.8cm、器高69.0cmの中形の壺形土器。

7号壺（第20図、PL. 12）

口径71.0cm、器高91.6cmを測る大形の壺形土器で砲弾形を呈す。口縁部は内唇が厚く発達した「T」字状で、端部はナデの為に若干凹む。胴部中位には複合山形凸帯が巡る。胴部は口縁直下から凸帯へ緩やかに膨らみをもって直線的につながり、徐々に径を減じながら底部へつづくスマートな器形である。口縁部・凸帯がヨコナデの他はナデ仕上げ。胎土に石英砂・雲母を多く含み、焼成は良好。また、わずかではあるが赤土粒を含む。色調は淡黄褐色。

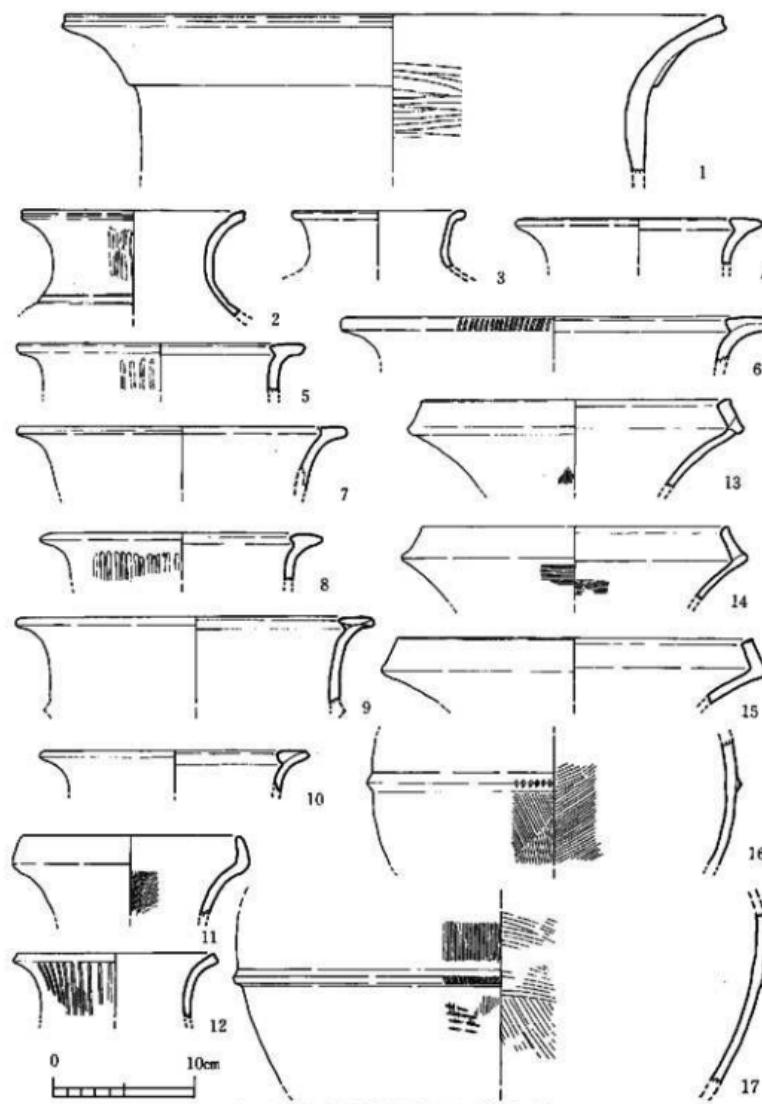
8号壺（第19図）

口頸部・底部を欠く壺形土器で、凸帯下で最大径59.0cmを測る。大きく膨らむ球形の胴部に2条の三角凸帯を巡らす。調整は外面が横方向の研磨、内面はナデで仕上げている。また、外面には炭様の黒色顔料が観察される。胎土に石英砂を含み、焼成は良好。色調は淡茶褐色。

(2) 壺形土器（第21図1～17、PL. 10・11）

壺形土器は前期～後期にわたって出土している。1は口径46.4cmの大形のもので、いわゆる有段状をなす口縁の端部はナデにより若干凹む。調整は外面がヨコナデ、内面は横方向の研磨を施す。2は口縁部がわずかに肥厚し、「く」字状に外反する。肩部には2条のヘラ描き沈線を巡らし、内唇部はわずかに凹む。口縁部内外はヨコナデ、頸部外面は縦方向の研磨、内面はナデ仕上げ。口径15.8cm。3は口径13.2cmを測る小形壺で、口縁部が短かく外反し、端部は丸くおさめている。外面とも摩滅が著しいが、口縁部はヨコナデ仕上げである。1・2は淡茶褐色を呈し、石英砂を多く含む。いずれも前期後葉のものであろう。

4～10はいわゆる「鶴先」状口縁の壺で、口縁部上面が平坦なもの（4・5・7～10）とわずかに傾きをもつものの（6）とに区分される。口径は4が17.6cm、5が20.2cm、6が30.4cm、7が23.2cm、8が20.2cm、9が24.0cm、10が18.6cmを測る。5・8は頸部にヘラ描きの暗文を縦方向に施している。6には口唇部に刻み目が施文されている。調整はいずれも口縁部がヨコナデの他は丁寧にナデで仕上げている。胎土に石英砂を多く含み、焼成は良好。色調は4・6・7・10が淡褐色、5・8・9は淡茶褐色を呈する。4はM-2より出土、その特徴から中期中葉のものであろう。11はいわゆる「袋状口縁」の壺で、口径15.5cmを測る。摩滅が著しいが口縁部

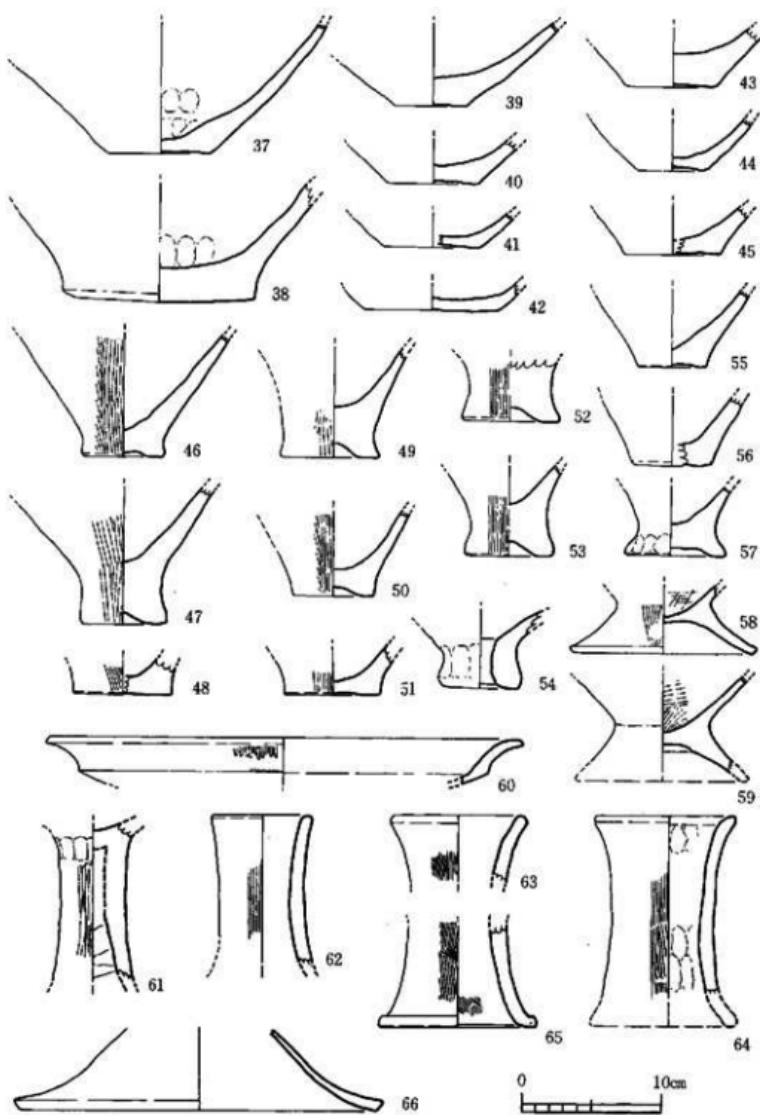


第21図 発生上器実測図-(1) (縮尺1/4)



第22図 弥生土器実測図(2) (縮尺1/4)

30 J-10地点の調査



第23図 弥生上器実測図(3) (縮尺1/4)

内外はヨコナデ、内面は細かい刷毛目調整を施している。胎土は石英砂を含み、焼成は良好。暗赤褐色を呈す。12はM-2より出土し、口径14.0cm。口縁部はゆるく外反し、頭部にはヘラ磨きの暗文を縱方向に施す。調整は口縁部内外がヨコナデ、内面は丁寧なナデ、外面は刷毛目後にナデで仕上げている。色調は暗茶褐色。

13~15はいわゆる「複合口縁」の壺形土器で、口縁部は直線的に内傾する。口径は13が21.9cm、14が21.8cm、15が25.4cmを測り、15は口唇部上面に浅い刻み目を施す。14はM-2より出土。内外面ともに摩滅が著しい。石英砂を多く含む胎土で、焼成は良好。16・17は口縁部・底部を欠く胴部資料である。球形の胴部には16が三角凸帯、17は「コ」字凸帯を各々1条貼付け、端部には刻み目を施している。内外面ともに刷毛目調整であるが、16は凸帯上半がナデ、17は凸帯下半が横方向の叩き後に刷毛目調整を施している。

(3) 壺形土器 (第22図 18~36, PL. 11)

18~32はいわゆる逆「L」字状口縁の壺で、口縁部直下に三角凸帯を有さないもの(18~28)と有するもの(29~32)の2つに大別される。また、逆「L」字状口縁の形状は同一ではなく、更に幾つかに区分される。

18~20は逆「L」字状口縁の上面がわずかに内傾し、内面の屈曲も明瞭で、突出した稜を有する。口径は18が25.4cm、19が26.6cm、20が22.6cm。19がPit 1より出土した他は縦べて包含層より出土。21・22は口唇上面が水平なもので、内面の屈曲はやや弱く緩い稜を有する。21は口径22.2cm、22は22.4cmで、胴部はやや張りぎみになる。石英砂を多く含み、21は褐色、22は淡褐色を呈す。23は口径21.8cmを測り、口縁端部がわずかに外傾するものである。端部は丸くおさめているが細く尖りぎみになる。胎土に石英・雲母を含み、淡赤褐色を呈す。24・25は口縁の屈曲が緩く、口唇端部は丸味をもつ。25は屈曲面が深く凹む。口径は24が22.2cm、25が25.4cm。胎土に砂粒を含み、焼成は良好。26~28は口縁部上面が内傾し、内面の屈曲も明瞭で強い稜をもち、その直下はわずかに凹む。また、口唇端部を丸くおさめたもの(26・28)と平坦に仕上げたもの(27)がある。27は平坦な端部に刻み目を施しているが、中央部がわずかに凹むためにあたかも2段に施文した様な感がある。口径は26が11.4cm、27が26.6cm、28が22.4cm。胎土に石英砂を含み、色調は26・27が淡赤褐色、28が赤褐色を呈す。

29~32は逆「L」字状口縁直下にシャープな三角凸帯を1条貼り巡らすものである。29・30は口縁部上面がゆるく弓曲し、端部は丸くおさまる。内面の屈曲は明瞭で、突出した稜を有し、その直下は若干凹む。口径は29が23cm、30が21cm。31は口縁上面が平坦で、内面に強い稜を有する。胴部は凸帯部で一度屈曲してほぼ垂直に立ち上がる。石英砂を多く含む胎土で、淡褐色を呈す。口径は31.2cm。32は口縁部上面が内傾し、端部は尖りぎみになる。内面の屈曲はゆるい。口径は21.8cm。淡褐色を呈す。調整はいずれも口縁部内外がヨコナデ・内面はナデ・外面

は刷毛目あるいはナデ仕上げである。33は1号土塁より出土したものであるが、小片のため復元しえなかった。口唇部を欠くが恐らくは逆「L」字口縁であろう。口縁下には複合山形凸帯が貼付けられている。色調は淡褐色を呈す。

34～36は「く」字状口縁の甕である。34は口径26.4cmを測り、平坦に仕上げた端部には刻み目を施文する。内外面とも粗い刷毛目で仕上げ、この時の工具を用いて口唇部に施文している。35は「く」字状に外反する口縁に長卵形の脣部がつく甕で口径15.2cm。口縁端部は丸くおさめ、内面に弱い稜がつく。口縁部内外がヨコナデの他は粗い刷毛目調整。36は口頭部を欠く長卵形の脣部で、底部は所謂「レンズ」状をなす丸底気味の平底で、底径6.0cm。内外面とも粗い刷毛目調整。この35と36は直接には接合しないが、胎土・焼成・色調及び調整等をも類似し、また、いずれもM-1より出土しており、恐らくは同一個体である可能性が強い。

底 部 (第23図 37～57, PL. 11)

37～57は底部を一括した。37～45は壺の底部で、底径は38が12.8cmを測る他は4.5～7.2cmと小形のものである。調整は摩滅が著しいが、いずれも内外面ともにナデで仕上げ、底部内面には指頭押圧痕の残るものもある。46～57は甕で、上げ底を呈するもの(47・49・50・52・53・57) 平底のもの(46・48・51・54～56) とに大別され、底径は5.6～7.0cmを測る。内面はいずれもナデで仕上げているが、外面は刷毛目(46～53)、ナデ(54～57)仕上げである。54は底部穿孔の土器である。また、内面に炭化物の付着しているもの(47～51・55・56)もある。

脚 台 (第23図 58・59, PL. 11)

直接脣部と接合する資料がないので明確ではないが、恐らく鉢につくものであろう。58は底径12.6cmを測る。59は底部を欠くがいずれも脚部が低いものである。調整は脚部内面がナデ、脣部内面は粗い刷毛目、外面はナデあるいは刷毛目で仕上げている。胎土に砂粒を多く含む。

高 坯 (第23図 60・61)

60はM-2より出土した高環坏部で、口径33.6cmを測る。口縁部は大きく外反し、杯底部の脣曲が明瞭である。調整は内面がヨコナデ、外面は底部がヘラ、口頭部は刷毛目の後ヨコナデで仕上げ、縦方向に暗文風のヘラ描きが残る。また、内面には煤が付着している。淡褐色。61は脚柱状部のみの資料で、調整は外面が縦ヘラ研磨、内面上半は絞り後にナデ、下半は粗いヨコヘラ仕上げである。砂粒を多く含む胎土で、淡茶褐色。

器 台 (第23図 62～66, PL. 11)

器受部と脚部のひらきに大きな差はない、ゆるやかに円筒状をなす器台である。口径は62が6.8cm、63が9.2cm、64が9.8cmで、65は底径11.2cmを測る。口縁部はゆるく外反し、端部は丸くおさめている。口縁部・底部はヨコナデ、外面は刷毛目、内面はナデ仕上げ。66は大形器台の脚部で、底径25.6cm。脚部内外がヨコナデ、内面はナデ、外面は縦方向に粗くナデ仕上げ。

4) 縄文時代後期

J-10i 地点の南側に位置する J-10e 地点にも後期後半の遺物が出土した。砂疊層中からも出土したが包含層ではない。弥生時代の M-2 内からも後期後半の遺物が認められ、包含層の確認を得た。暗黄褐色シルト層中に包含され、その下層に縄文時代前期の包含層も認められたため、縄文後期包含層から縄文前期包含層までを 10cm を 1 単位とする 10cm 壁りを行なった。1 単位を 5 cm ずつの 2 つに分け、それぞれ a 面上、a 面下とした。縄文後期は a 面のみで b 面から h 面までが前期の包含層であった。J-10e 地点の包含層部分を除くと疊層が凹地となり、凹地の部分の包含層・遺構は削平を受けている。凹地の部分だけに包含層・遺構が残存するのである。J-10i 地点も四箇遺跡 A 地点、都計道路（A 地点の中に含まれるが、A 地点と J-10i 地点の間）と同一の遺跡の範囲中であり、J-10e 地点も含まれている。第 4 章での第 1 微高地と呼称した範囲の中で縄文後期後半の時期で最小単位の集落形成と考えられる。

a) 包含層

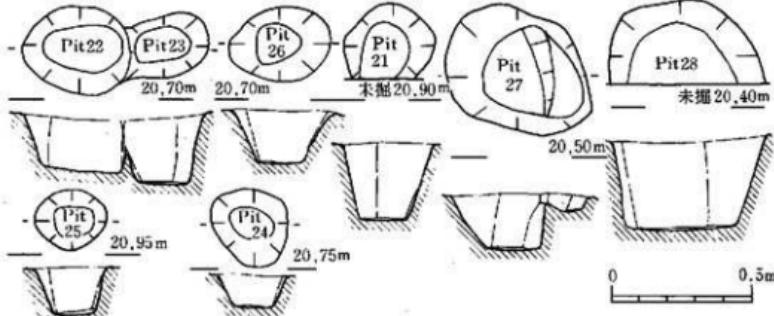
J-10i 地点では多数の Pit 群とともに、土器、石器も多量に出土している。J-10e 地点にも Pit が 5 つ検出された。遺物も出土しているが少量である。やはり主体は四箇 A 地点から南側の J-10i 地点までで、J-10e 地点はその一部分が検出されたものであろう。包含層としては 10cm 程度しかなく南側に行くほど遺物は少ない。

b) 遺構

Pit が 5 つ検出された。表-2 は、縄文後期と前期の Pit 計測表である。規模的には大きくななく最大の Pit 28 でも幅 0.54m、深さ 0.31m である。

表-3 縄文前期・後期の Pit 計測表

(単位: cm)											
Pit番号	幅	横	深さ	形状	概要	Pit番号	幅	横	深さ	形状	概要
21	32	28	24	円形	後期	25	24	22	16	円形	後期
22	30	30	19	円形	*	26	32	24	16	*	前期
23	20	26	27	円形	*	27	55	42	18.2	*	*
24	26	25	11	円形	*	28	34	—	31	円形	*



第24図 縄文前期・後期遺構実測図 (縮尺1/20)

c) 出土遺物

J-10i地点の南側に位置し、J-10i地点の包含層・造構のつづきが確認された。遺物も縄文時代後期後半に位置付けられる。出土遺物の量は、包含層の範囲が狭い関係もあり、J-10i地点ほど多量に出土していない。出土遺物は縄文後期後半の土器・石器・土製品等がある。土器は精製土器と粗製土器に大別され、精製土器には浅鉢形土器と深鉢形土器がある。粗製土器は小片が多いため定かでないが浅鉢形土器と深鉢形土器である。

精製浅鉢形土器

磨消縄文土器 (25図 1・2, PL. 13)

25図1は口唇部から口縁部にかけて縄文を施し、その間に5条の沈線文を巡らす。沈線文の1と2、4と5の間に縄文を研磨して消している。胸部は、横方向からの研磨を加えて整形している。内面は口唇部のみにナデで仕上げられている。内面胸部は横方向からていねいな研磨で仕上げている。2も1と同様の文様形態である。異なる点は、縄目施文具の相違と内面に沈線が2本入る点と口縁部に舟が付着している点である。施文具の縄目文様は2の方が1より大きく右よりである。口径は28.2cmで1よりわずかに小さい。内外面の研磨はていねいである。

沈線文土器 (25図 3・4, PL. 13)

25図3は、口唇部から口縁肩部にかけて4条の沈線文を巡らす。1と2、3と4の間に右から左の方向へ斜行沈線文を施す。口縁部は内凹し、肩部を粘土で肥厚させて胸部下半との区画を行なっている。口唇部はナデにより丸みを持ち外面はていねいに研磨されている。4は3ほど内凹しないが肩部から丸みをもしながら内凹する。口唇部に波状文を施し、肩部に2条の沈線を巡らす。沈線間にくの字の縹緥文を施す。内外面とも研磨が荒く、外面は凹凸が激しい。

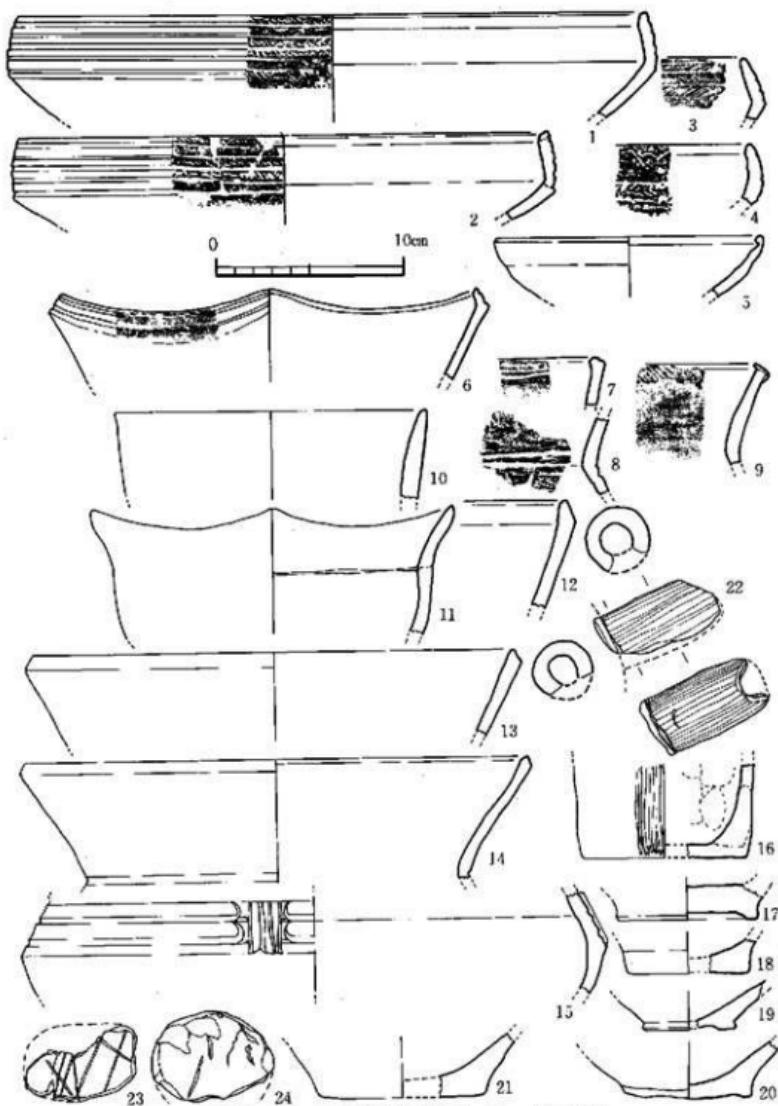
無文土器 (25図 5, PL. 13)

小形の鉢形土器である。口径14.5cmで文様はない。口唇部を内面に折り曲げるタイプで内外とも荒い研磨を施す。

精製深鉢形土器

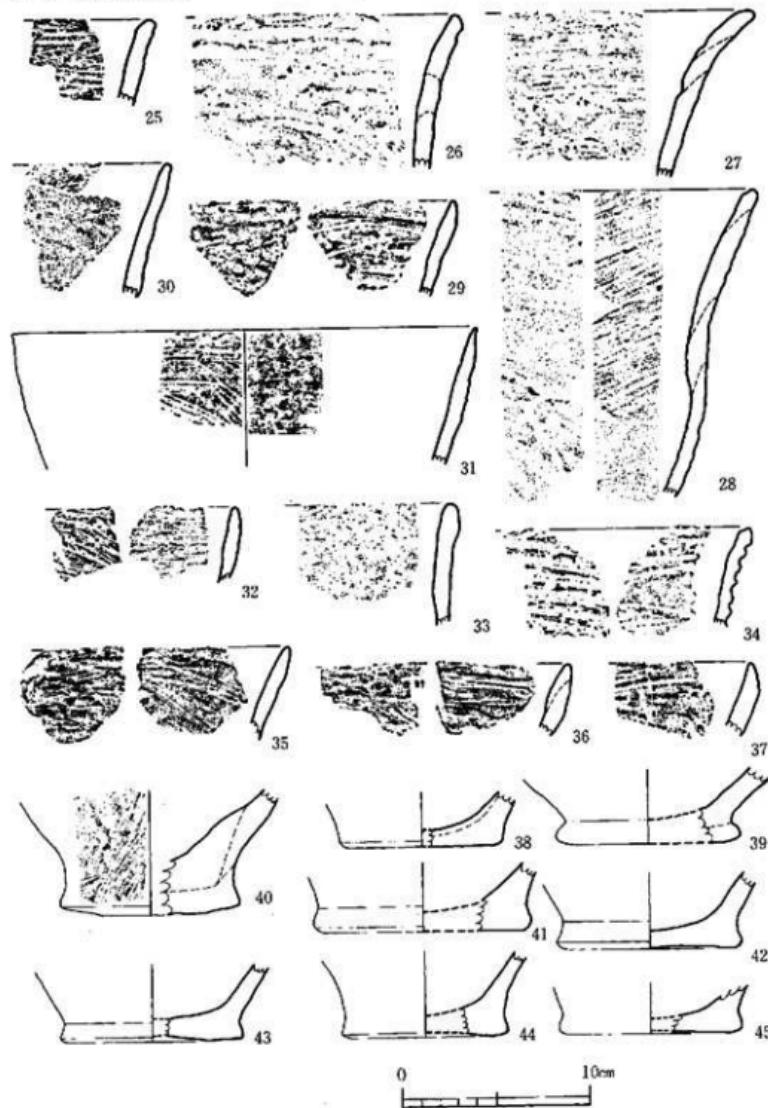
磨消縄文土器 (25図 6~9, PL. 13)

6は山形口縁を示すもので口唇部が急に内凹する。その部分に縄文を施し、その間に2条の沈線を巡らす。沈線の中間を研磨している。縄文は口唇部の先端部と肩部上しか認められない。7も6と同じ形態であろう。6・7の内外面はていねいに研磨されている。8は頸部の部分である。胸部との境に2条の平行沈線文を配する。その下端に縄文を施し、コの字形の沈線によって区割を行ない外面を研磨し縄文を消す。9は口唇部にT字状の粘土を張り付けて口唇部の頂部に縄文を配する。また肩部にも縄文を配している。内外面とも横方向による研磨を施す。



第25図 土板・施文後期土器実測図(1) (縮尺1/3)

36 J-10 地点の調査



第26図 純文後期土器実測図-(2) (縮尺1/3)

沈線文土器 (第25図 13~15, PL. 13)

14は頸部に1本の沈線を配しているが胴部が破損しているので沈線文か否かは不明。口縁部は外反する。端部は内外面ともヘラによる研磨で綾を持つ。これは13も同様である。13・14とも内面は横方向、外面は縦方向の研磨を施す。15は胴部最大径の部分から頸部にかけて3本の沈線を巡らす。中央部で縦に伸びた隆帯を持ち、この部分で沈線は上部と下部の沈線が繋がる。内外面ともよく研磨されている。

無文土器 (第25図 10~12, PL. 13)

10~12とも文様はない。10は口径16.7cmの小形深鉢、11は山形口縁を持つ小形深鉢で口径19.4cmである。11は内外面ともよく研磨されているが、12の外面は荒いヘラ削りのみである。

精製土器の底部 (第25図 16~20, PL. 13)

2つに区分される。17・19・20のように上げ底と16・18の平底である。小形の17~19は浅鉢の底部であるがこのほかに図示していないが浅鉢底部で丹塗りのあとが認められるものも出土している。16は底部からほぼ垂直に伸びる形態を示す。精製土器の胎土はよく精選され2~3mmの砂粒と金雲母を含み焼成も良好である。色調は黒褐色が主である。

注口土器と土板 (第25図 22~24, PL. 13)

22は注口土器の注口の部分である。外面はよく研磨されている。23は表面に沈線が6条施され文様を形成する上板である。24は円板である。22は胎土、焼成、色調とも精製土器と同一。

粗製土器口縁部 (第26図 25~37, PL. 13)

第26図 25~37は粗製土器の口縁部である。ほぼ4つに大別することができる。25~28のように口縁部が外反するもので、特に27は激しく外反し口縁部が開くタイプである。内外とも荒い条痕を施す。29~31・34は前のタイプほど外反せずむしろすんなりと伸びるタイプである。これも荒い条痕が生であるが31のようにナデによる仕上げをするものもあり、これは半精製と呼ばれているものである。32~33はほぼ直に口縁が伸びるタイプである。35~37は浅鉢の器形を示す。すべて内外面に荒い条痕を施すものと、内面にナデ等を加えた半精製土器、34のようには条痕幅が1.2cmの間隔で施すものがある。胎土は3mmから5mm程度の石英片等が多量に含まれるが金雲母は少ない。焼成は普通である。色調は暗褐色から褐色を呈する。

粗製土器底部 (第26図 38~45, PL. 13)

38~41は平底、42~45は上げ底である。39は胴部から伸びた器壁が底部で一段としまり底面の張り付け面に接合する。40の内外面には荒い条痕を施す。底面に指の痕跡があり上器を持ち上げるときについたものと思われる。また内面に煤が付着している土器(42)がある。内外面の調整も条痕だけのものやナデによる仕上げを施すものもある。胎土は3~5mm程度の砂粒を多く含み金雲母は少ない。焼成は普通、色調は明褐色を呈するものが多い。

5) 縄文時代前期

1) 包含層

弥生時代中期の溝M-2の下層から縄文後期の包含層（約10cm）が検出された。その下層から轟式土器を主体とする縄文前期包含層が発見された。地形は南西部に上部礫層が認められ、東側から西側にやや傾斜している。基盤である礫層に凹凸地があり、その凹地に暗黄褐色シルト層と黄褐色シルト層、青白色シルト層が堆積している。この3つの土層が約90cm堆積している。この土層を10cmを1単位としてa～i面まで掘り下げた。出土遺物はc面からf面の約40cmの部分に集中している。土層では黄褐色シルト層である。遺物は磨滅を受けているものはほとんどなく現位置を保ち集中的に出土していた。四箇遺跡B地点でも曾畠式土器を主体として同様の凹地に出土している。四箇周辺遺跡においても同様の凹地が多数あると考えられる。

2) 遺構

第27図に示した様にPitが2と不整形豊穴が検出された。Pitの2つはd面から検出された。不整形豊穴もd面からである。Pit 29の出土遺物は第28図3の轟式土器、Pit 30は第31図46に示した轟式土器の底部。不整形豊穴からは多量の轟式土器と第32図62・68にみられる曾畠系土器である。このほか第27図1にみられる様に炭化物を多量に含んだ状態で炭化物層が砂層に挟まれた状態である。しかしこの豊穴からの、種子等の植物遺体は認められない。第27図の2・3は遺物出土状態であるが、2のように1個体つぶれた状態が認められた（第30図33）。3は石皿や土器の出土状態であるが、あたかも周辺の石をあつめた状態とも受けとれる（第35図32）。第27図4は、遺物出土状態である。ほぼ北西部に集中している。

3) 出土遺物

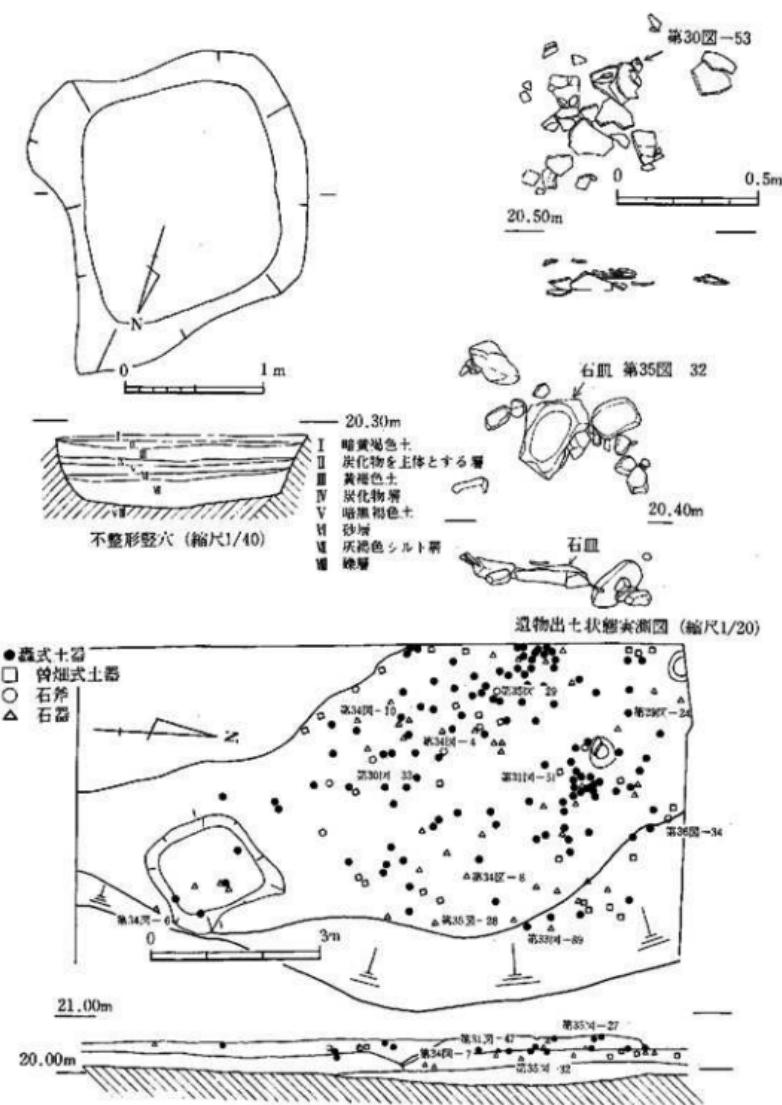
近接したB地点が曾畠式土器が主体であったのに対し、J-10#地点においては曾畠系の土器を含むが、轟式系統の土器が主体であった。曾畠系の土器は破片が主で器形復元できたものはないが、轟式土器は器形復元のできた2個体のほかに口縁部・胴部・底部とその土器片も豊富で遺存状態もよかつた。轟式土器は隆帯あるいは調整方法によって、曾畠系土器は文様構成の施文方法により説明する方法をとった。

轟式土器（第28～31図、PL. 14）

口縁部に刻み目をもつものをI類とし、刻み目をもたないものをII類と大きく分類し、さらに隆帯の断面観によりa、隆帯が高く断面三角形を呈する。b、隆帯は幅広で低く総体的に丸みをもち、カマボコ形を呈する。c、隆帯は低く細いもの、とに細分した。

Ia類（第28図1・2・4・8）

Ia類あるいは3条の隆帯が巡る口縁部片である。隆帯はいずれもシャープな作りを呈し、口縁部は「コ」字状をなす。II類には貝の背による押圧にて浅い刻み目を施す。刻み目は1・8



第27図 不整形竪穴・縄文前期遺物出土状態 (縮尺1/20・1/40・1/100)

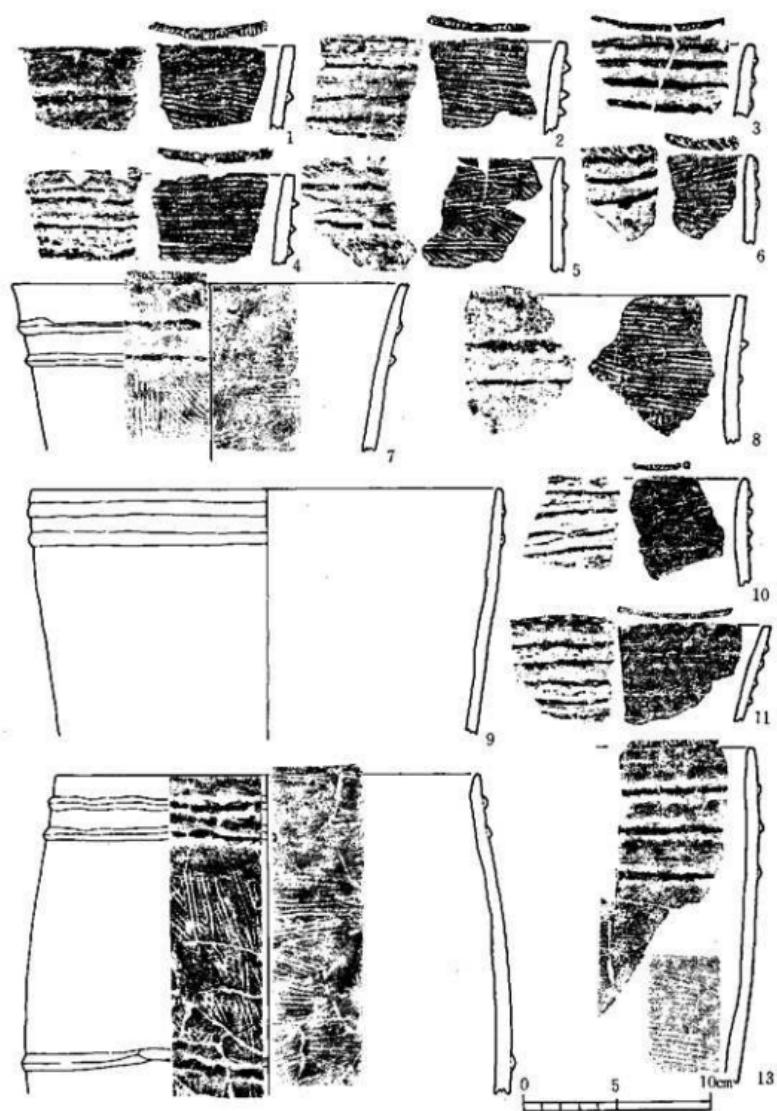
では口唇部全面に及び、2・4は部分的だが規則正しいものである。器面の調整は外面の隆帯付近のみに、いずれもナデ調整が施されている。内面は4のみ地文の条痕をナデ調整によって消し、1・2は部分的に条痕を消した部分と残した部分が認められる。8は全面に地文の条痕が残る。2・4・8の外面には部分的に煤が付着している。いずれも焼成は良好である。

Ib類 (第28図 3・5~7・9・11~14)

口唇部が「コ」字状をなす3・6・7・11とやや丸みをもつが平坦な面を残すもの5・7・12・13に分けられる。口唇部はIa類同様に貝の背による押圧の浅い刻み目が部分的なもの3、他は口唇部全面に施される。器形は口縁部が直口するものが多いが7・9・11は外反する。隆帯は2条ないし3条を有する。6の隆帯文は口唇部と同じ高さから隆帯を巡らしている。隆帯文の下、左側辺部に沈線が認められ隆帯文+沈線文の文様構成をもつ可能性があるが、沈線部付近は僅かしか残っていない明確でない。12は他とは違った器形を呈する。口縁部は内汚し、胴部が張った樽型を呈す。口縁部に2条、胴部に1条の隆帯をもつ。内面の調整は条痕を消したもの3・9・11、ナデ調整で部分的に条痕を消しているもの5~7・12・13となる。隆帯部分の調整はナデが施される。7・12の隆帯文以外の部分では地文の条痕が認められる。3・7・12は外面に煤が付着し、9は内面に火を受けた痕跡をとどめる。いずれも焼成は良い方で黒褐色・暗褐色を呈する。胎土には金雲母を含むが精良されている。14は口唇部の刻み目が他とは異なり、口唇部をへラ状器具で切り刻むように深くて強いものが施されている。現状では2条の隆帯を有するが、おそらく2条以上の隆帯をもつものと考えられる。内面は部分的に条痕が残っているが、外面の隆帯部付近はナデ調整にて整形されている。

Ic類 (第29図 15~23)

3条ないし4条の隆帯を有する。口唇部には貝殻の背による浅めの刻み目が認められる。外面の隆帯付近はナデて、地文の条痕を消すが、隆帯部以外では条痕を残すもの15、他の外面はナデて地文の条痕を消している。内面の調整は外面と同様にナデて条痕を消したもの15・16・18・19・21、ナデ調整を施すが条痕を部分的に残すもの17・20・22・23がある。口唇部は「コ」字状あるいは、丸みをもつが平坦面を有するものとなる。16~18はやや外反する器形で他は直口する器形を呈す。17は胎土が精製された焼成堅敏な土器で暗黒褐色を呈し遺存状態は良い。胴部上位に2つの孔をもつ。孔は外面から穿孔されたものである。口縁部は若干波形を呈するものと考えられる。胴部から底部にかけては全面に煤の付着が認められる。21も同様に孔をもつが、孔は隆帯文のすぐ下に有り、内面と外面から穿孔されたものである。16の隆帯部は棒(竹か木)により貼り付け整形されていて隆帯間が丸みをもっている。外面は17と同様に煤の付着がある。いずれも胎土は2~3mmの砂粒等、金雲母を含んでいるが精製されている。色調は暗褐色もしくは明褐色を呈している。



第28図 繩文前期土器尖測図一(1) (縮尺1/3)

I a 類 (第29図 27・29~31, 第30図 34)

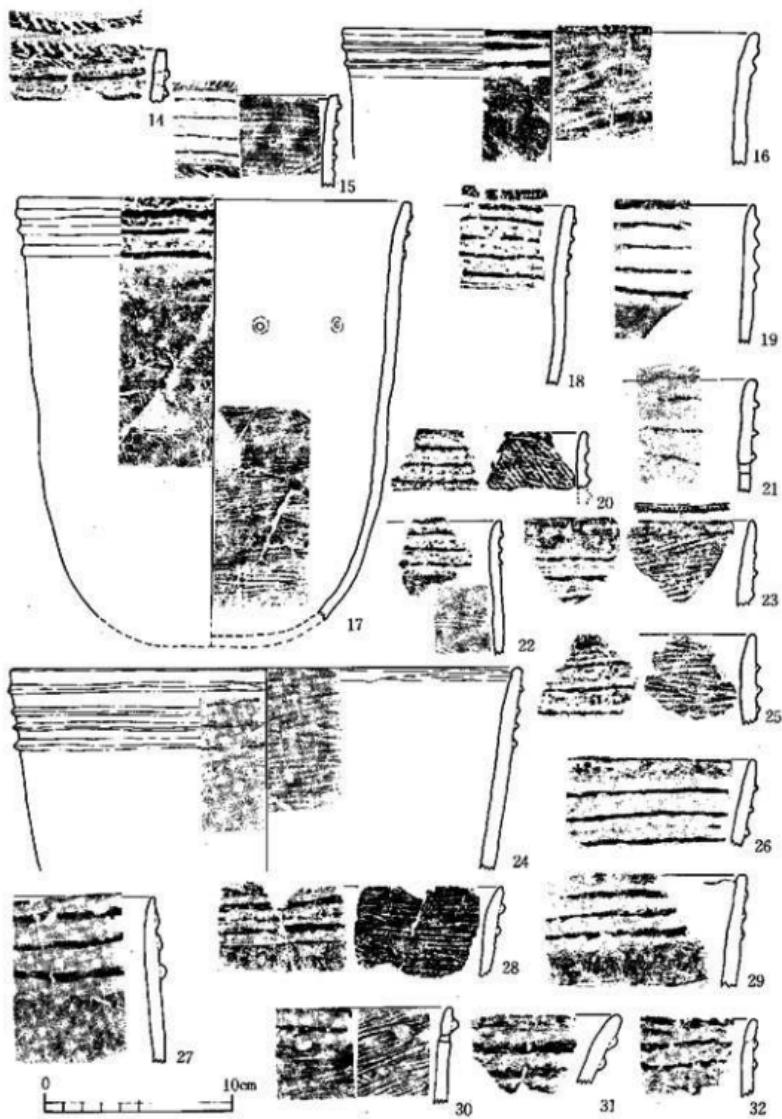
27はやや丸みをもつが「コ」字状に近い口縁部で、やや脣部の張る器形を呈するものと考えられる。焼成は良好で暗褐色を呈し、外面はナデで条痕を消し煤が付着する。内面はナデ調整が施されるが、丁寧なナデと粗いナデで浅く条痕を残す。隆帯は幅広い粘土紐を指でつまんで貼り付けているが雑で、ボテボテした感じが強い。29の口唇部はナデ整形により僅かに丸みをもつ、内外面ともにナデ調整によって条痕が消されている。外面の一部に煤が付着する。内面の口唇部はナデのために部分的に段を有する。隆帯は指でつまんで貼り付けているために部分的に波うつ。30の内外面はナデ整形しているが深く条痕を残す。隆帯は1条で、隆帯のすぐ下に孔をもつ。孔は外面から穿孔されている。隆帯は、つまんで貼り付けた後、わりと丁寧にナデで仕上げる。いずれも焼成は良好である。31は他に比較して極度に外反する口縁部で、口唇部は丸みをもち、内外面ともにナデで条痕を消し整形している。34は復元口径23.4cm、精製された胎土で焼成は良好。外開きの口縁をもち、器壁はやや厚手となる。3条の隆帯は貼り付け後棒状(竹もしくは木)のもので整えられ隆帯間は丸くなる。

I b 類 (第29図 24~26・28・32, 第30図 33)

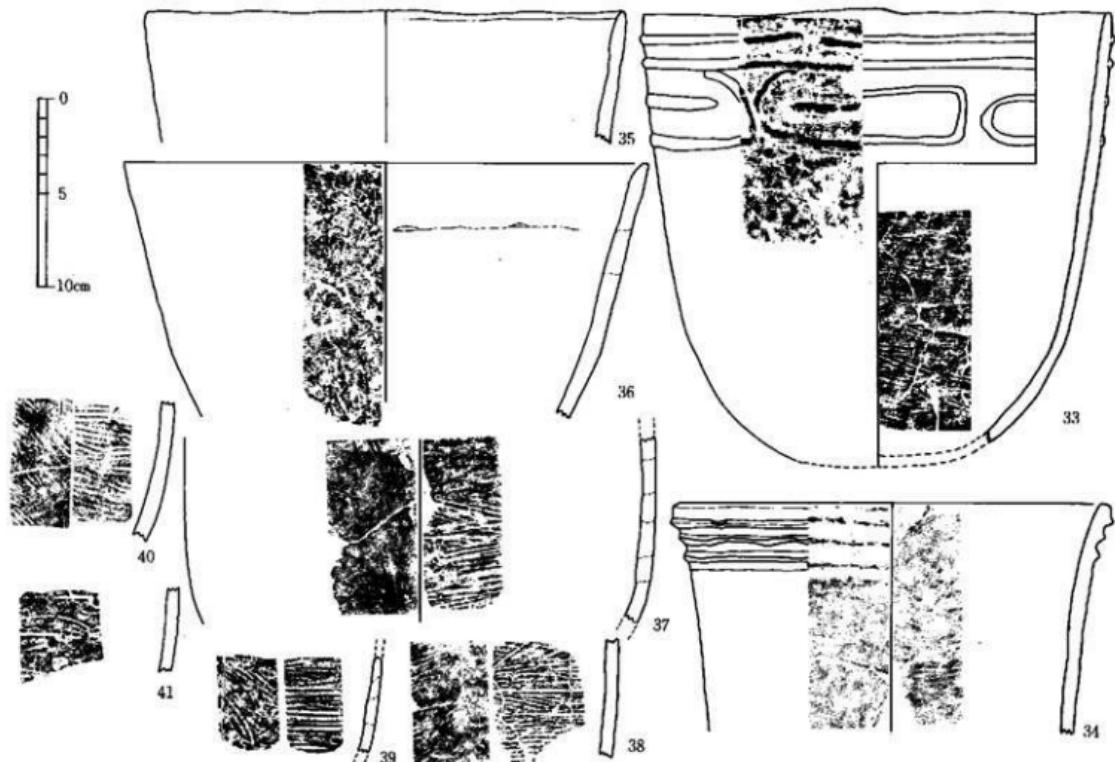
24・25の隆帯觀は断面三角形を呈する。粘土紐を貼り付けた後、丁寧なナデで細く低くシャープに仕上げている。24の内面は条痕をそのままにし、外面はナデ調整。25は内外面ともにナデ調整が施されている。26はやや丸みをもつ隆帯で、内外面はナデ調整が施され、外面の一部に煤が付着する。28は2条の隆帯をもち、外面はナデ調整、内面は条痕が残るが、口唇部近くはナデで部分的に消す。32は28と同様な調整が施され、口縁部は丸みを持つ。隆帯は直線的ではなく右上りとなり、直線的に伸びる隆帯ではないかもしれない。33は底部を欠失しているが、遺存状態の良い土器で第27図(遺物出上状態)にある様につぶれた状態で一括して出土した。口唇部はやや丸みをもった「コ」字状をなす。この土器は口縁下端に2条の隆帯をもち、その下端に左・右のうず巻状の隆帯を交互に付けるのが特徴とする。うず巻の上端は2本日の隆帯の下に接する。うず巻は所謂満巻文ではなく著しくずれた、まろびしたものである。内面の調整は口端部から脣部下位まではナデしているが、地文の条痕を浅く残す。脣部下位から底部付近は横方向の条痕が残る。外面は条痕の後ナデ調整を施すが、ナデにより条痕を消した部分と残している部分がある。隆帯部分は隆帯にあわせて縦・横方向のナデを施す。僅かだが口縁は波状を呈する。焼成は良く復元口径25cm、器高24.5cmである。

無文土器 (第30図 35・36)

35・36の内外面調整はナデが主体であるが、胎土には雲母を僅かに含むが精良され、焼成は良好である。35は復元口径25.4cm、36は28cmを測る。35は外面に煤が付着する。36の脣部付近は地文の条痕を残す。整形方法から轟系のものと考えられる。



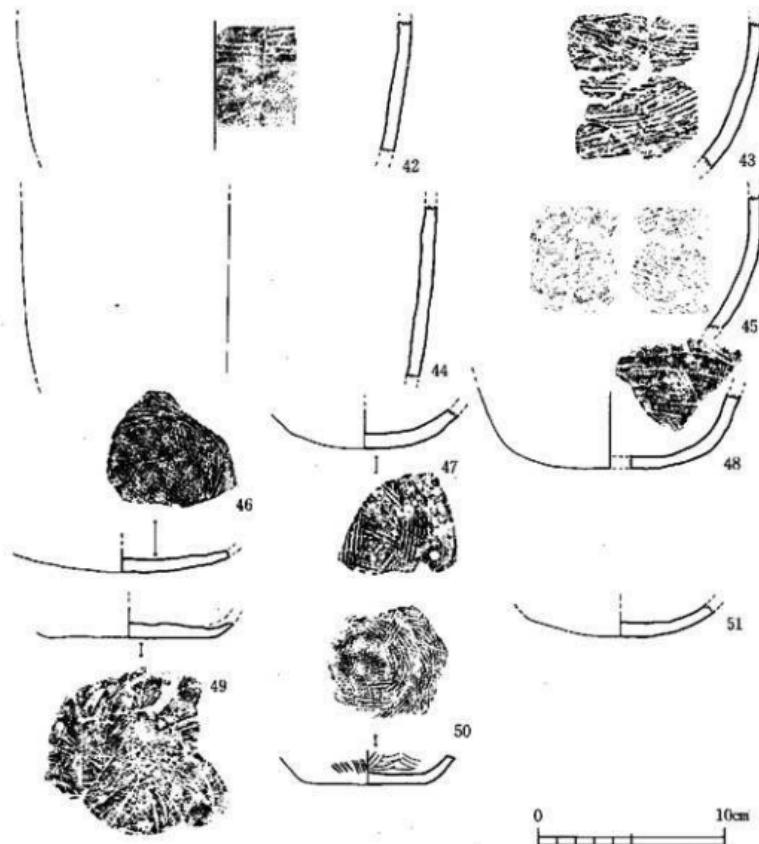
第29図 繩文前期土器実測図(2) (縮尺1/3)



第30図 縄文前期十器実測図-(3) (縮尺 1/3)

脇部・底部 (第30図 37~41, 第31図)

37~45は脇部片で、外面の整形はナデが主体である。内面はナデ整形により条痕を消した部分と条痕を残した部分とがある。37・43・45は底部に近いもので総体的に底部近くの内面には条痕が残されている事が伺える。46~51は底部片で、丸みをもった不安定な底47・48・51とやや丸みをもった平底46・49・50とに分けられる。47の中心部以外の内面には横方向と山形の条痕を加え、外面は左右・上下・平行な条痕によって菱形に施文されている。47・49は底面から脇部に移行する部分が疑似口縁となり整形方法の一端が伺える。49・50は精製された良質の胎



第31図 繩文前期土器実測図-(4) (縮尺 1/3)

土が使用され焼成も良い。他はやや砂粒が多くザラザラした感じである。

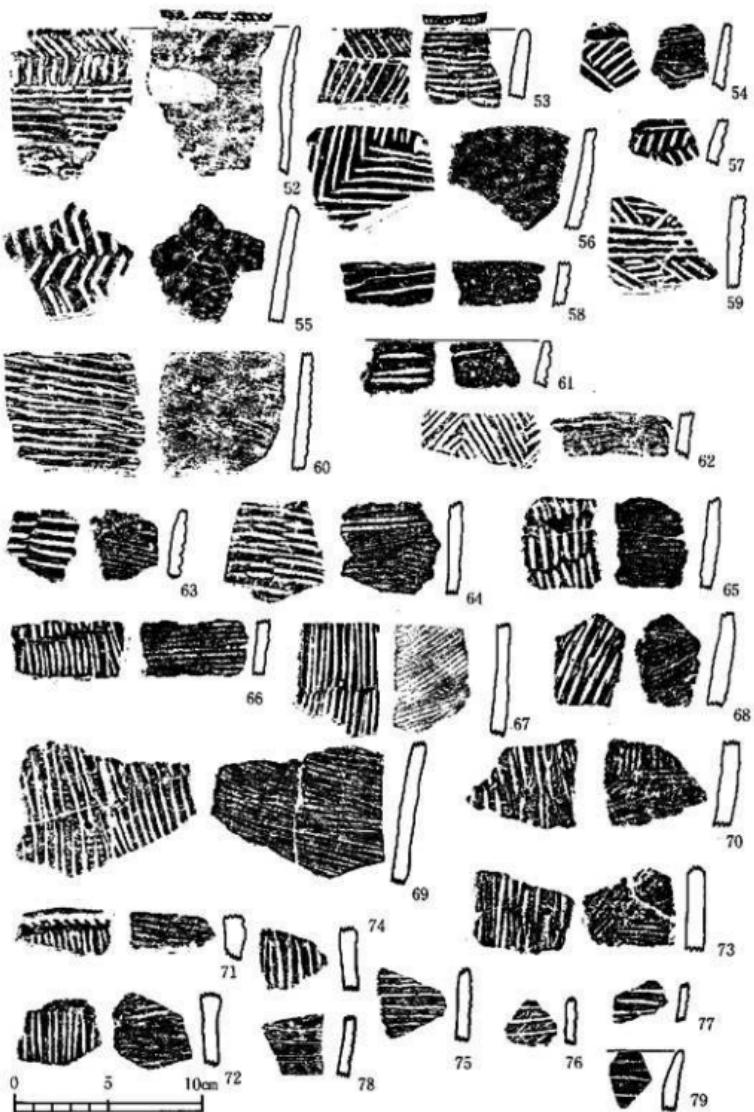
曾畠式土器 (第32・33図, P.L. 15)

ここでは胎土・施文方法により曾畠式土器と広い範囲で整理したが、内外面の調整などからさらに細分する必要があると思われる。

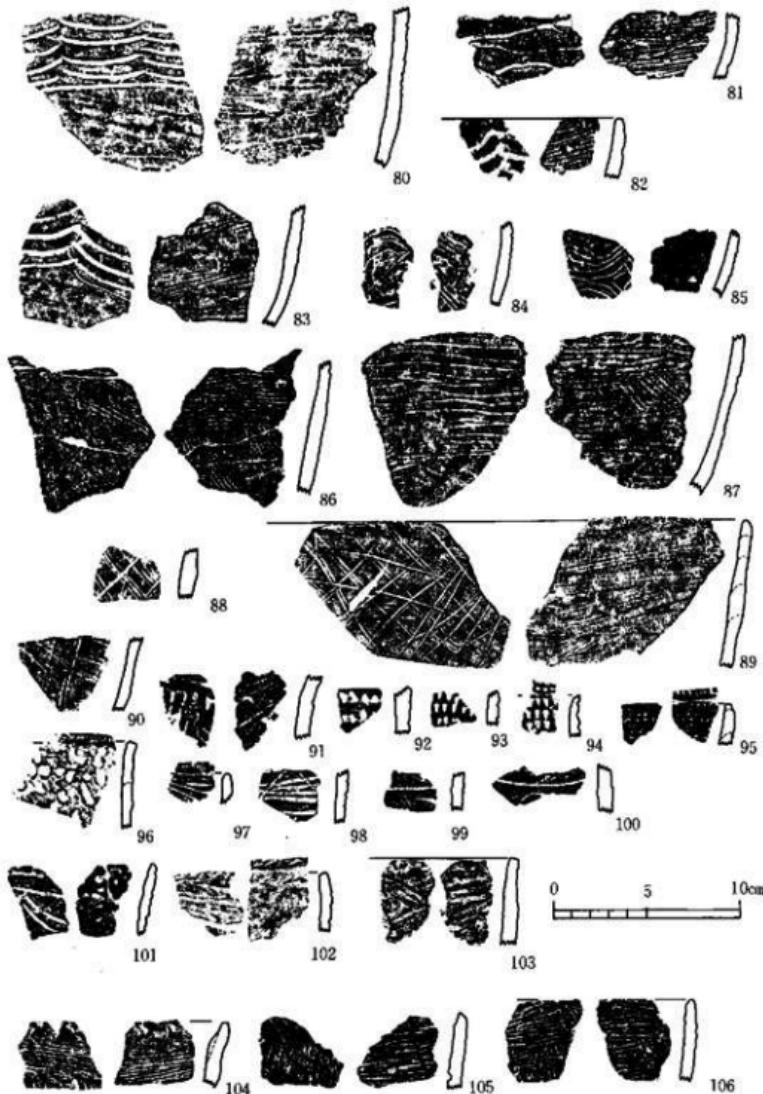
52は非常に薄手の焼成良好な口縁部片で、内面はわりと丁寧なナデが施され、外面には斜め短直線・直線・横線によって文様を構成。口唇部にはヘラ状器具による刻み目が施されている。胎土には多量の滑石・雲母片が混じる。53は胎土に滑石を含まない土器片で内面は条痕が残り外面はやや細めのヘラ状器具にて斜方向の短直線それを区切る横線さらにその下方に斜の短直線で文様構成をなす。口唇部に刻み目をもつ54は53と同様な文様構成をなすが、内面はナデ調整されている。胎土には滑石を含まない。55・56・59・62はいわゆる幾何学文様を外面に施文したもので、内面はナデ調整で整形されている。55・56の胎土は滑石を含まないが、59・62は多量の滑石・雲母を含んでいる。いずれも施文具の太さに若干の差異が認められるものの、ヘラ状器具による規則正しい文様構成をなす。58・61は磨滅の著しい小片であるが、内面は丁寧なナデ調整が加えられ、外面は横の沈線が施文されている。小片のため文様構成は不明。胎土には多量の滑石や雲母を含む。61はやや丸みをもった「コ」字状の口唇部に刻み目をもち内面に一条の沈線が認められる。60は淡黒褐色を呈する胴部片で胎土には滑石・雲母を含み、やや細めのヘラ状器具にて横走する線を施文。64・68は内面の条痕をナデ調整で消すが、条痕を浅く残し、外面は浅い横の沈線が施文される。70は内面の条痕をナデにより浅く残し、その上方に縦の短直線を施文している。71は口縁部に近い破片で内面はナデ、外面は短直線と刺突風の文様が描かれている。75・78の内面は丁寧なナデが施され、外面には細い線が横に施文されている。77は75と同様な調整・施文であるが、胎土に滑石・雲母を含んでいる。80は底部に近い破片で胴部から上にやや曲折した沈線・横線を描き、胎土には滑石・雲母を含む。81~83の内面はナデが施されるが浅く条痕を残す。文様は直線ではなく曲線化している。84は弧線と斜線の組み合せにより文様構成されたもので内面は部分的に条痕が消されている。85は細い弧線の施文をもち内面はナデが施される。87は外面にやや曲線化した横線を描いた土器片で、内面はナデ調整。88~97~102は細いヘラ状器具により弧状あるいは斜線にて文様が描かれている。91は口縁近くの破片で外面に刺突文を施す。93・94は胎土に少量ながら滑石・雲母を含み、外面は刺突文が描かれる。94は口唇部に列点文を施す。

その他の前期土器 (第32・33図 63・65・69・72~74・76・79・86・89・90・92・95・96 103~106, P.L. 15)

103~106以外の土器はいざれも文様形態において曾畠式土器に類似するが、胎土には滑石は含まず、器面の調整に曾畠式土器とは違いをみせる。轟系統の地文の条痕をナデ調整して消すが、



第32図 桶文前期土器実測図(5) (縮尺 1/3)



第33図 縄文前期土器実測図一(6) (縮尺 1/3)

ナデは完全ではなく部分的に施すものと地文を残すものがある。103・105・106は内外面に条痕を残す土器で全体的にローリングを受け磨滅が著しい。104は波状を呈する口縁部片で口唇部付近は指で両側から挟んで整形し、内外に半截竹管による爪形文を施す。106は灰褐色を呈する薄手の口縁部片で、口唇部は丸みをもった「コ」字状を呈する。

J-10ℓ 地点の前期土器について

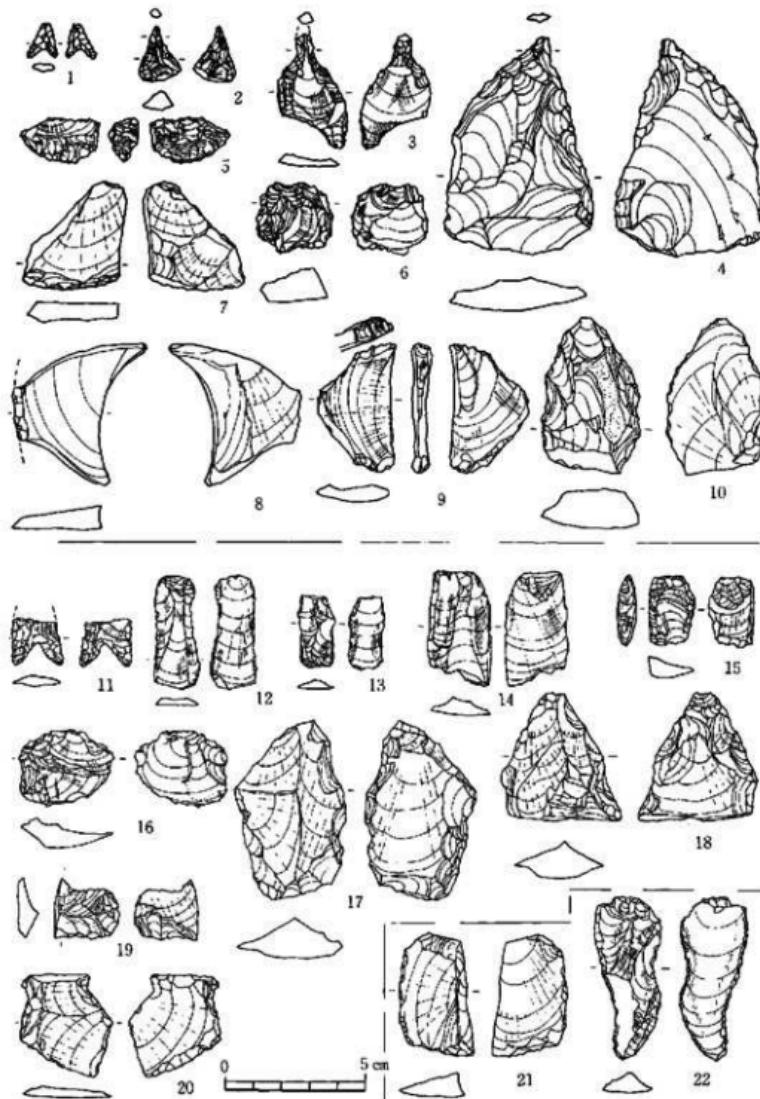
單一な包含層からの出土で、轟式・曾畠系の層上関係は明確に把握する事はできなかった。ここで轟式土器としてあげたものにはいくらかの特長の違いを見せる。J-10ℓ地点の轟式土器のほとんどが、口縁部に平行して数条の隆帯をもつものである。その隆帯の形状は①三角形を呈し高いもの、②幅広でやや低く丸みをもちカマボコ形を呈するもの、③低く細いものの3つに分られる。轟式土器の中では隆帯の形状が細く低いものが若干先行するものと考えられる。ここでは3通りの形状を示すものの、幅広くやや低いものが主流をなす。器面の調整はナデを施すことによって意図的に地文の条痕を消そうとしたものが多く認められる。また第30図33の様に隆帯に特異な文様形態をみせるものや、第28図12の様に腹部に隆帯をもち樽形の器形を呈するものもみえるが、これらは主流をなすものの変形と考えられJ-10ℓ地点の轟式土器の特長となるべきものではない。この様に隆帯・調整・器形に若干の差異が認められるものの、それは著しいものではなくJ-10ℓ地点の轟式土器は前期前葉轟B式にあてはまると考えられる。

次にその他の前期土器としてあげたものは曾畠系統の文様をもち、轟系譜を引くものと考えられる。従来轟C・D式と呼ばれているものは二本単位の施文具が基本となっているが、ここでは基本となる「本単位の施文具の使用されたものは認められないが、文様形態は曾畠式土器と言われるものに類似する。しかし轟系統の特長である条痕地を土器面に多く残すことから、^{註1} いずれにも属さない。第33図89・90は鹿児島県・阿多貝塚に類似の出土を見る。内面の条痕地をナデ調整しているものの浅く残し、外面は地文の条痕をナデ調整し、その後斜格子文様^{註2}^{註3} を描いている。しかし条痕は浅く残る。山鹿貝塚・新延貝塚においても類似性をもつ土器群の出土を見ている。これらの土器群は曾畠式土器の規制を残すものの轟式土器の系譜をひく。轟C・D式と曾畠式土器との中間的なものとしてとらえられている。しかしJ-10ℓ地点におけるこれら土器群は四箇B式地点の資料整理がなされた段階で、さらに深く比較検討されなければならないものでありここでは曾畠式と轟C・D式の中間的存在になりうる可能性をもったものとして資料紹介しておきたい。

註1 鹿児島県日置郡金峰町教育委員会「金峰町埋蔵文化財調査報告書(1)」1978年3月

2 芦屋町教育委員会「山鹿貝塚」 芦屋町埋蔵文化財調査報告書 第2集 1972年

3 鞍手町埋蔵文化財調査会「新延貝塚」 1980年



第34図 石器実測図-(1) (縮尺 1/2)

6. 各時代の石器 (第34・35・36図, P.L. 16)

石器は弥生時代の石器・縄文後期の石器・縄文前期の石器が包含層・遺構内より出土した。各時代の石器総数85点でその内の43点を図示した。縄文前期の石器は第34図1~10, 第35図, 縄文後期は第34図11~20, 第36図34~39, 弥生時代は第34図21~22, 第36図40~43である。時代別に記述していく。

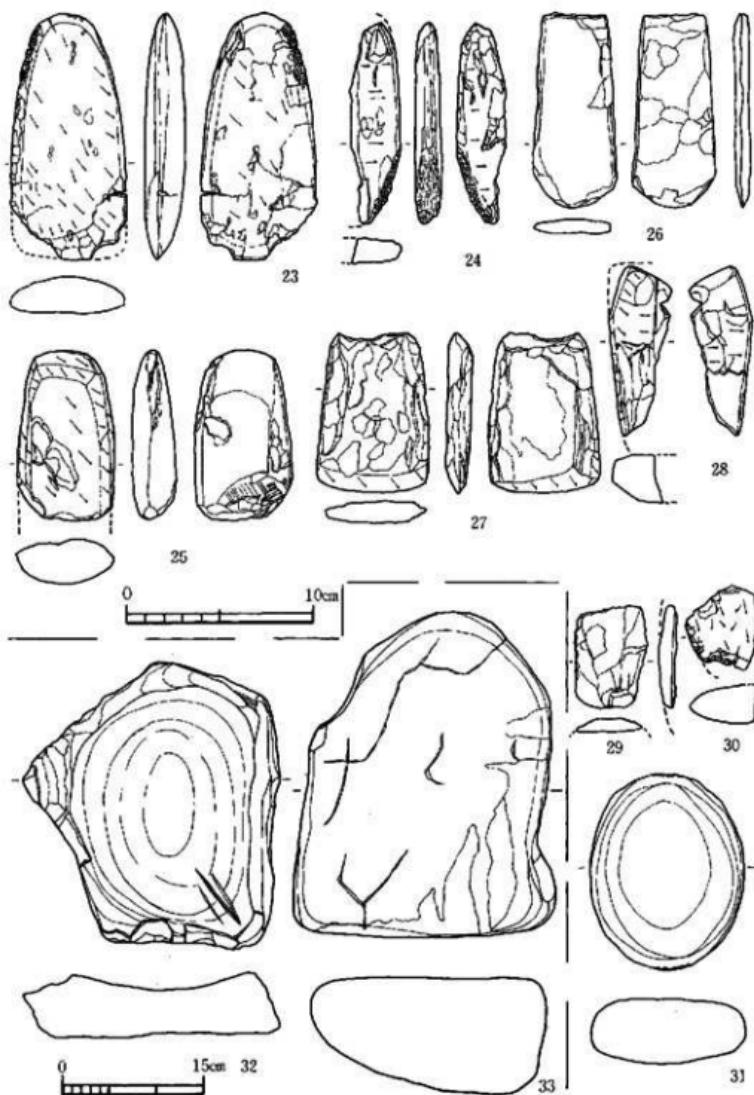
縄文時代前期の石器

総数30点出土した。ほとんど包含層からの出土であるが、第27図の遺物出土状態で示すごとく石組によって構成された中に石皿が検出されているところから遺構らしきものもある。

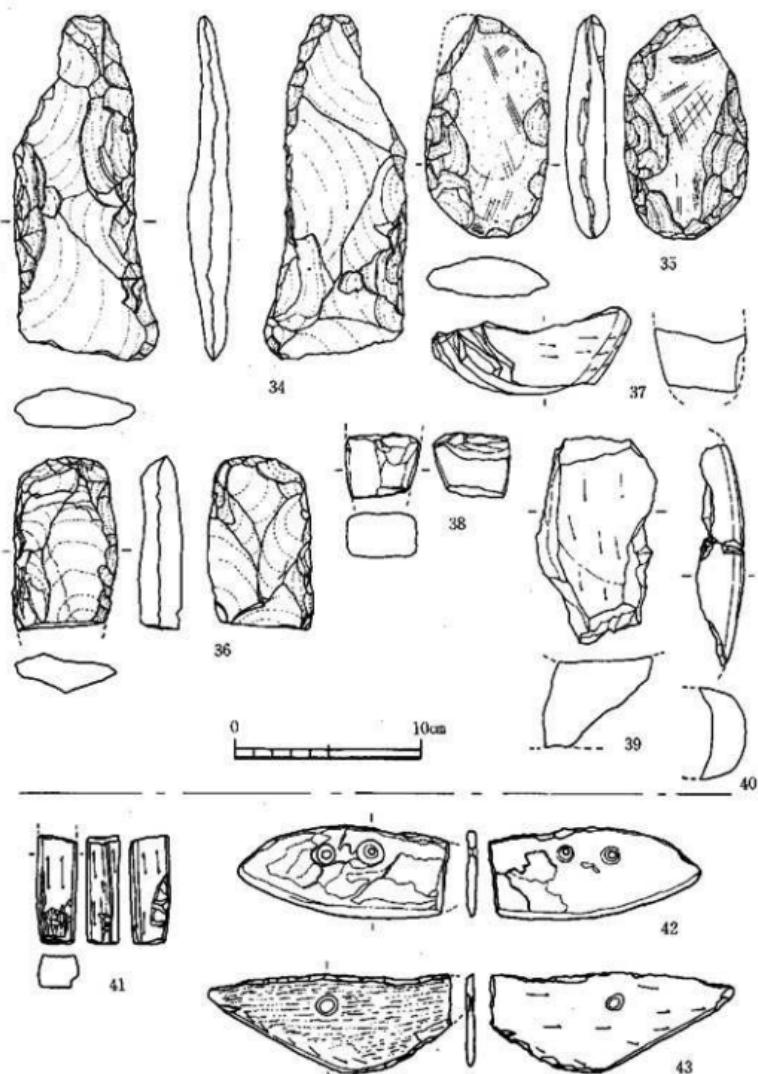
石鑿1は細石鑿の箇に入る規模である。全長1.3cm, 幅1.0cm, 厚さ0.3cmである。両面からの押圧剥離によって入念に仕上げられている。石材はサスカイト質安山岩。2~4はドリルである。2は不定形剥片を素材とし、先端部に両面から数回の剥離を加えている。3は縦長剥片のステップフレーキングしている素材を利用して、バルブを両面から剥離を加えて剥ぎとり先端部を作出している。背面に多くの擦痕が認められる。4はスクレーバーとも考えられるが、先端部が急にすばまり細かな剥離が集中しているところから一応ドリルとして考えた。スクレーバーの用途も十分に考えられる石器である。横長の剥片を素材とし、ほぼ両面からの剥離を加えている。2・3は黒曜石、4はサスカイト質安山岩を石材としている。5・6は楔形石器である。上端及び下端に細かな剥離痕が残り、上端部に打撃痕が残っている。両方とも黒曜石を石材としている。7・8はスクレーバーである。7は末端部に一方向から、二段加工を加えて刃部を作り出している。8は残存する部分が一部分で明確ではないが一方向からの剥離によって刃部を形成している。他の側面部はすべて一打によって剥ぎとられており、一見磨かれたと思われる感が強かった。この面を利用すればグレーバーとしての機能も考えられる。7・8ともサスカイト質安山岩である。9は横長剥片の側面部を二方向からの剥離によって彫刻刃面を作り出しているグレーバーである。黒曜石を石材としている。10は尖頭状石器で横長剥片を素材として周縁部に一面のみに加工を加えている。スクレーバーとしての用途が強い石器である。石材はサスカイト質安山岩である。

第35図の23~30は磨製石斧である。23・24・25・30は蛇紋岩を石材とし、他は粘板岩である。23・24は火を受けた痕跡があり、特に23は全体的に火を強く受け、石材が弱くなり表面がボロボロな状態である。24も側面部に強く火を受け、23と同様な状態である。25は破損した刃部を再度研磨して製作中のものである。30も一部に火を受けている。26は扁平で刃部に丸みをもつ形態である。27は幅広く片刃に近い形態を持ち上端は破損している。28は柱状片刃石斧の形態をする。側面にも研磨が認められる。29は石斧の剥片である。

31は花崗岩の敲石である。上下に打痕が残り、表面は磨かれている。



第35図 石器実測図-(2) (縮尺 1/3 - 1/6)



第36図 石器実測図（3）（縮尺 1/3）

32・33は石皿である。32は硬質砂岩、33は花崗岩である。32は中央部が凹み使用度が高いことを物語っている。右下の部分に3条の凹みが認められる。側辺部にも同様に凹みが認められる。裏面も使用しているが表面ほどではない。33の使用度は32ほどではないが表面に使用された痕跡が認められる。

縄文時代後期の石器

包含層全体狭かったし、本来はJ-10i地点と同一の遺跡である。後期の石器は45点出土している。その内17点を図示した。遺構からの出土はなくすべて包含層の石器である。

第34図11は特に後期の時期に多い剥片鎌である。先端部は破損しているが、縦長剥片を素材としている。石材は黒曜石である。12~14は刃器である。すべて黒曜石を石材としている。12・13とも一方向からの剥離によって剥取されている。14は上下二方向の剥離方向を持つ。15は楔形石器である。上下に細かな剥離がみられる。ただ側面を見ると彫刻刃面に近い剥離が認められ、彫器の可能性もある。16は剥片である。打面は自然面である。表面にステップした部分が見られる。15・16とも石材は黒曜石である。17・18は先端部が尖る形態を持つ尖頭状石器である。17・18とも両面からの剥離を持ち断面三角形の形態を持つ。機能としてはスクレーパーであろう。19は石匙の破片で背面からの剥離が主で刃部を形成している。20も石匙と考えられる石器である。抉入部の剥離は浅いが形態的には石匙と考えられる。19が横型、20が縱型であろう。17~20はサスカイト質安山岩を石材として使用している。

第36図34~36は扁平打製石斧である。34は大まかな剥離の後側辺部に細かな剥離を加える。35は自然石の周辺部に剥離を加えただけのものである。下部の刃部に擦痕が認められる。36は34より形の整ったものである。34~36は安山岩を石材としている。37・40は磨石である。37は大部分破損しているが、円形の形状と思われる。40は砂岩、37は安山岩を石材としている。38も37・40と同じく磨石。ただ火を受けた痕跡を持つ。安山岩を石材としている。39は花崗岩を石材とした石皿。

弥生時代の石器

M-1の砂層とM-2から出土した5点を図示した。石器は10点している。

第34図21・22はM-1の砂層中より出土。21はサスカイト質安山岩のスクレーパーである。22は刀器で剥取方向は二方向を示す。黒曜石を石材。第36図の41は砂石製の砥石である。全面を砥石として使用している。一面に段を持つ所からその部分だけ極度の使用があったと思われる。42・43は「石包丁」である。42は粘板岩を石材としている。形態は柳葉形をする。刃部は片面を主要に研磨されている。穿孔は両面からである。43は石包丁未製品である。形態的には三角形の形状を示すと思われる。穿孔は両面から1方だけ行なわれているが途中である。研磨も刃部の部分から行なわれているが途中である。石材は凝灰岩である。

第 4 章 ま と め

四箇周辺遺跡の緊急調査は、昭和51年から開始され、5年目を迎えた。いざれも個人住宅の建設によるもので、今日までの発掘調査件数は16件で、試掘調査も含めると総件数34件である。5年間の発掘調査で四箇周辺遺跡は、その一端をのぞかせた感がある。それは、住宅公園の造成に伴なって調査された四箇遺跡が発端となった。低湿地の調査の難しさを痛感させながらの調査であったが、今日までの調査範囲で、三つの微高地と杭列遺構の確認、時代別では、縄文前期・縄文後期、弥生から古墳時代初期にかけての遺構・遺物を出土複合遺跡である点、各時代の木製品の出土等である。しかしながらこれが四箇周辺遺跡の全貌ではない。数m離れた場所ではまったく予測もしていない遺構・遺物の検出が認められてきたからである。四箇遺跡の縄文後期の特殊泥炭層や、四箇B地点、J-10ℓ地点から出土した縄文前期の包含層も予測できなかった重要な発見であり意外性に富んだ遺跡である。

これまでの成果を述べると、1) 三つの微高地（北側から第1微高地と呼称する）の規模、2) 古墳時代前期の遺構の検出、3) 弥生中期における第1微高地でのあり方、4) 縄文後期の広がり、5) 縄文前期の発見である。

1) 三つの微高地の規模とその内容（第37図）

今日までの調査で大まかではあるが三つの微高地が発見された。北側の四箇遺跡A・B地点を含んで南側は、J-10ℓ地点、J-1b地点を境界とする第1微高地、J-10ℓ地点の東側のM-1を境界とし、北側はJ-11b地点を、東側はJ-11c地点、南側はK-11b地点、西側はK-11d地点、この範囲にある第2微高地、第3微高地は四箇東遺跡を北側の境界として南北に伸びる範囲であるが、この第3微高地の規模は、調査地点が3ヶ所だけで、範囲は不明である。

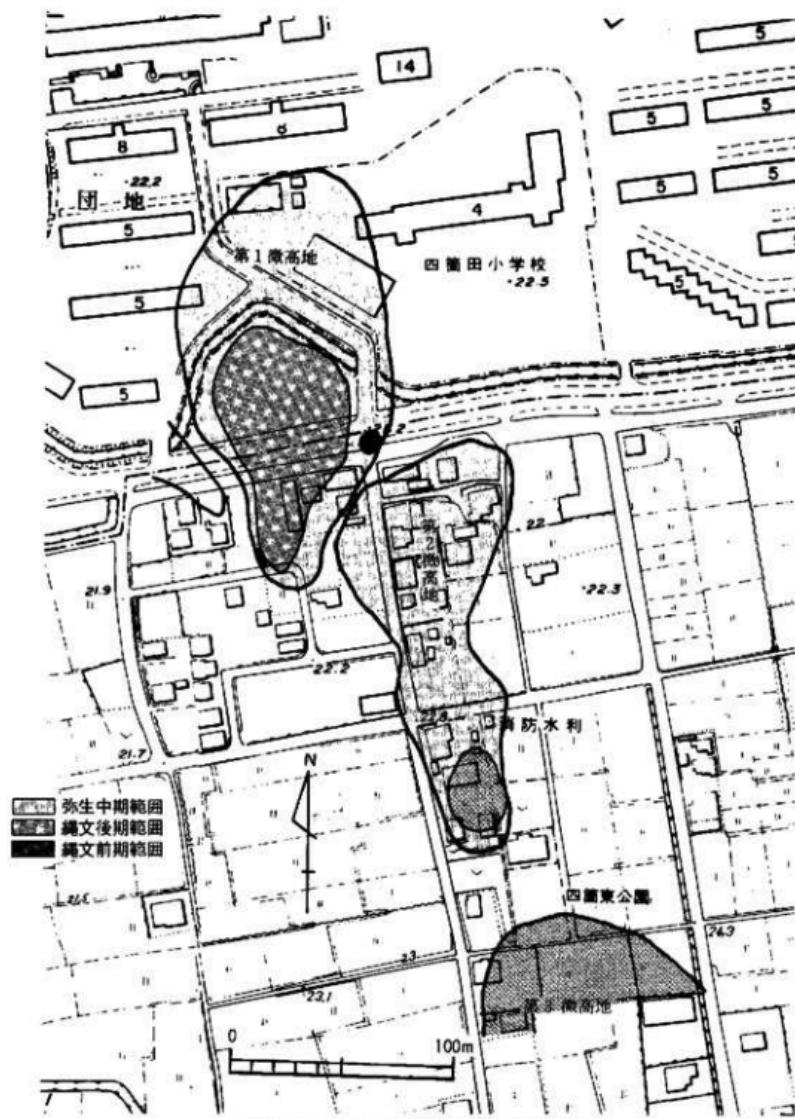
第1微高地の大きさは南北に長く伸び 185m を測り、東西は最大の所で95m を測る。第2微高地も南北に長く伸び 175m、東西は65m と細長い微高地である。第3微高地は不明。

内容は第3微高地から縄文時代後期の遺構・遺物が多量に出土する。第2微高地も第3微高地と同様に縄文時代後期の遺物が発見されているが、この微高地に住宅が建ち込んでいるためその内容は不明。内容がほぼ明確になりつつあるのは第1微高地である。2)~5)までの成果はこの第1微高地からである。その内容を順に述べることにする。

2) 古墳時代前期の遺構

微高地上での古墳時代前期の遺構は、ほとんど確認できていなかった。これが杭列遺構の場

56 微高地のあり方



第37図 四箇周辺の微高地図 (縮尺 1/2,500)

合には量的にも質的に良好な遺物・遺構が確認できている。第1微高地には遺構はないものとして考えていただけに、今回J-10ℓ地点で削平が著しいにもかかわらずその遺構が検出できたことは、注目に値する。これで四箇遺跡C地点、D地点、J-10a地点、J-11d地点の杭列遺構（湿地の部分）建築材等の時期と同時期の溝、住居址等が削平を受けてはいるが第1微高地、及びその他の微高地にも存在していたことで調査をつづけていく上での1つの問題提起となる。

3) 弥生時代中期における第1微高地のあり方

四箇遺跡・四箇周辺遺跡の中で第1微高地内における弥生中期の遺構を取り上げてみると四箇B地点の溝・住居址・Pit群・土塙、四箇A地点では、溝・住居址・土塙・Pit群、四箇周辺遺跡J-10i地点では、住居址・溝・Pit群、J-11a地点では、溝・Pit群であった。微高地外では、四箇C地点、E地点、B地点の杭列遺構・堰状遺構、四箇周辺遺跡では、J-10a地点の杭列遺構がある。これらの中で斐棺墓の発見だけがなかったのである。今回の調査J-10ℓ地点で初めて斐棺墓が発見されこれで弥生中期の遺構が出揃うことになる。

微高地では、住居址・溝・ピット群・土塙・斐棺墓があり、第1微高地内全域に広がっている。特に南側に集中している。しかし全体的に50cm以上の削平が行なわれているため、南側に集中するのではなく全体的に遺構の広がりが考えられる。溝は、大きく2つに分けられる。微高地の裾部を巡る溝（J-10ℓ地点・J-10i地点でM-2と称した溝）と微高地の東側に位置して微高地を2分する溝である。住居址は、削平されていることもあって少ない。四箇A・B地点から4軒とJ-10i地点から1軒である。斐棺墓が8基でこれも少ない方であろう。

これらのことから四箇周辺での微高地における弥生時代中期の単一時期の集落形成を見ることができるのではないであろうか。

四箇遺跡・四箇周辺遺跡の微高地には、縄文時代から数回の氾濫が認められる。四箇A地点における土層状態では弥生中期溝中にもその上部にも砂礫層が堆積している。この氾濫を弥生時代中期の遺構時期と考えると住居址・斐棺墓の少ない状態もうかがえる。

4) 縄文時代後期における四箇周辺遺跡の広がりについて

縄文時代後期にわたる遺跡の広がりもほぼ確定できるであろう。微高地の地形は凹凸が激しく、四箇A地点のように孤状の凹地があったり、J-10i地点のように凸地があったりする。また都計道路部にも凹地や凸地が認められ、これらの凸地に集落がいとなまれたと考えられる。しかしながら弥生時代の遺構も削平が著しいが、縄文時代後期の凸地にいとなまれた集落も削平を受けている。これらの状態では推定するしかないが縄文時代後期における遺跡の広がりは、J-10ℓ地点の西側部分が南側の端である。これはJ-10i地点のつづきでA地点、都計道路まで含まれた範囲が縄文時代後期後半における遺跡の広がりと思われる。遺跡の大きさは、弥

58 微高地のあり方

生期の微高地をやや狭くした範囲で南北に約85m、東西に約50mの範囲であろう。

第2微高地にも破片ではあるが縄文後期後半の土器が出土している。第3微高地には四箇東遺跡が立地し、この遺跡も凹凸があり凹地の部分に多量の土器が出土している。凸地は第1微高地と同様に著しく削平を受けており、遺構はまったく認められない。

各々の微高地に縄文時代後期後半の遺物が出土しているのは特記すべきであろう。第2・3の微高地から同時期の遺物・遺構が検出されることはまちがいなく、今後の大きな研究テーマとして取り上げていきたい。

5) 縄文時代前期の発見

轟式土器・曾畠式土器がJ-10#地点から出土したが狭い範囲の中で多量の土器が出土した。J-10#地点とは別に四箇東遺跡B地点でも曾畠式土器を中心に出土している。B地点も5m×5mの範囲と狭い。今回のJ-10#地点では、轟C式が中心で轟B式、曾畠式土器も出土している。遺構も検出された。第27図1の不整形豊穴とPitである。不整形豊穴は炭化物(炭)が層をなしている。出土遺物からして縄文前期の遺構と考えられる。基盤である礫層の凹凸が激しく、その凹地のわずかな範囲から出土する。

B地点とJ-10#地点とは、直線にして60mしか離れていない。それも5m×5m程度の狭い範囲内に多量に出土した。またB地点は曾畠、J-10#地点は轟B式を主体に出土している点が問題点となろう。

以上大まかではあるが四箇東遺跡と四箇周辺遺跡のあり方についての問題を提起してみた。これからも調査していく上での一つのまとめと問題点の把握のつもりで記した。これらの問題を解決していくには数年の年月を要すると思われるが、低湿地での遺跡のあり方の難しさを痛感しながら先へ進んで行きたいと思っている。遺物についてふれることができなかつたが今後四箇東遺跡、四箇周辺遺跡の報告の中でふれることが多いと思われる所以今回は大まかに四箇周辺遺跡の概観を述べてまとめとしたい。また遺物はできるだけ図示することに努めたが時間と勉学不足のために割愛せざるを得なかつた。また報告されていない遺跡に関してもできるだけ早急にまとめる努力をしていきたい。なおこの報告書作成、調査に関して多くの指導助言、協力を得てようやく刊行にこぎつけた。末尾ながら記して感謝の意を表したい。

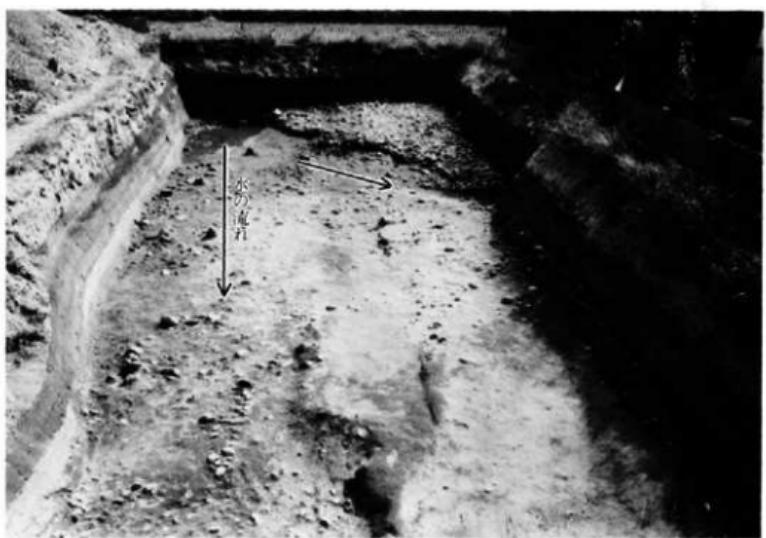
図版





(1) J-10k 地点河川

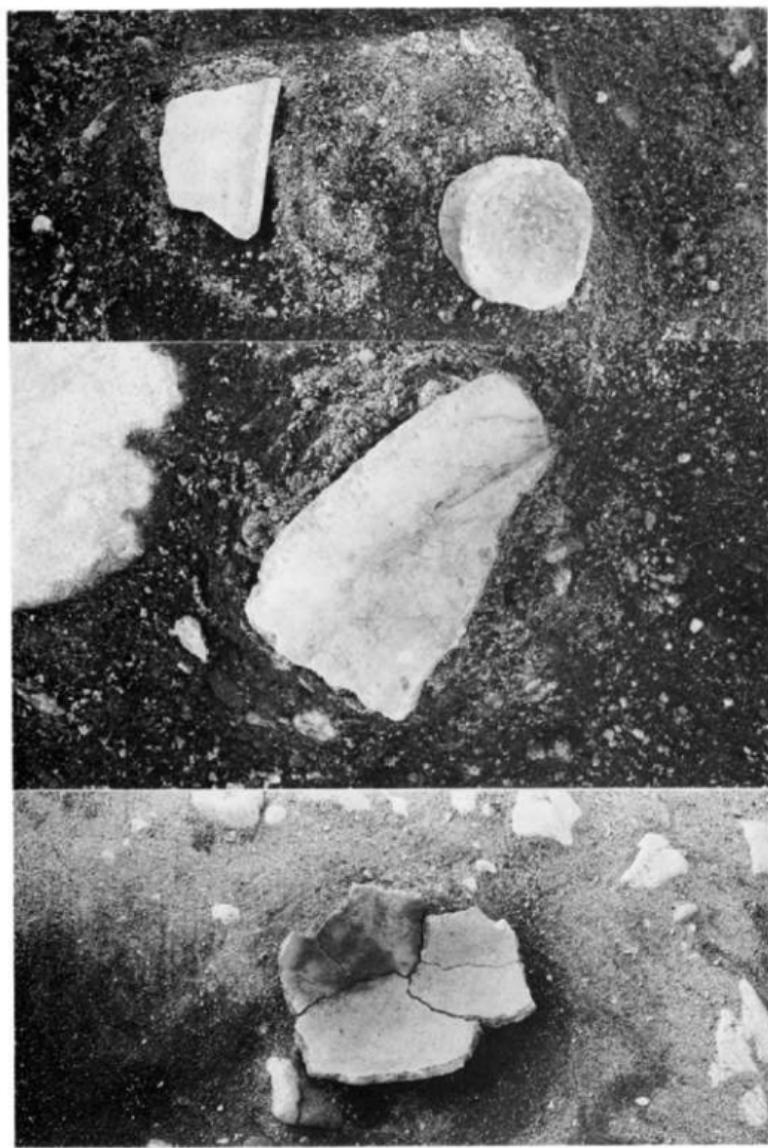
(東から撮影)



(2) J-10k 地点全貌

(北から撮影)

PL. 2



J-10k 地点遺物出土状態



(1) J-10 ℓ 地点(発掘調査前)

(西から撮影)



J-10 ℓ 地点(発掘調査中)

(西から撮影)



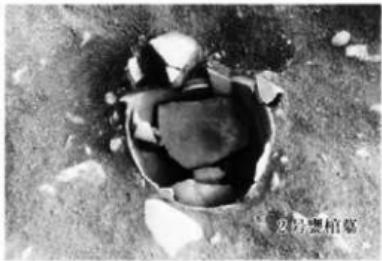
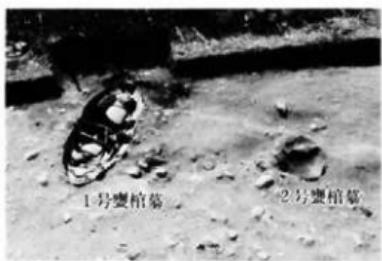
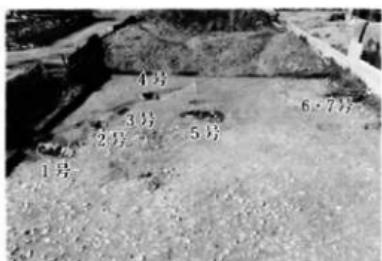
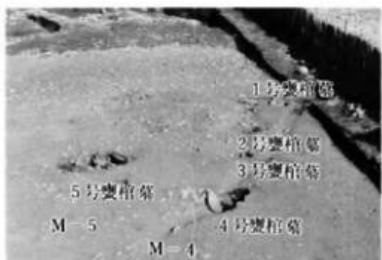
(1) 溝M-1検出状態

(東から撮影)

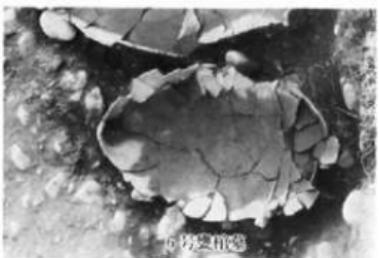


(2) 溝M-2・3・4の検出状態

(北から撮影)



各變相墓檢出狀態

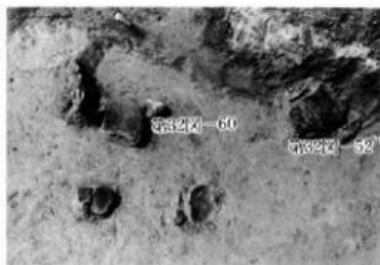


各要植墓檢出狀態

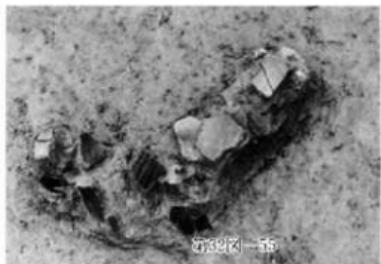




绳文前期包含层遗物出土状态



绳文前期遗物出土状态



绳文前期遗物出土状态



绳文前期遗物出土状态



绳文前期遗物出土状态



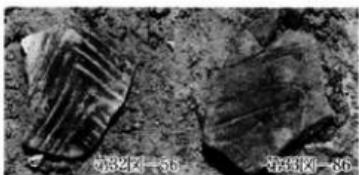
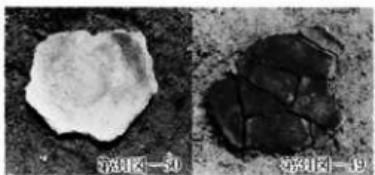
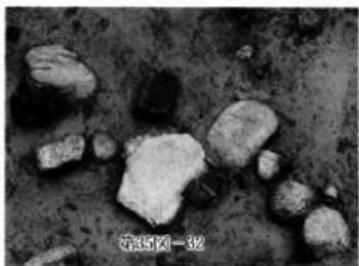
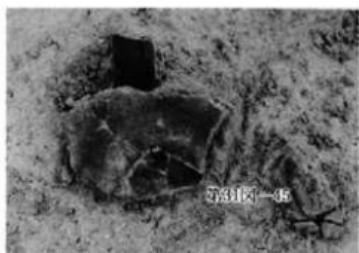
绳文前期遗物出土状态



绳文前、後期遗物出土状态



绳文前期遗物出土状态



縄文前期遺物出土状態

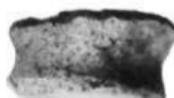
PL. 10



第6図-2



第6図-4



第6図-6



第6図-5



第6図-11



第6図-9



第6図-10



第6図-21



第6図-20



第6図-14



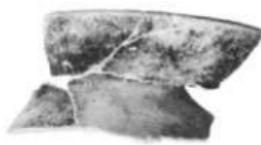
第6図-16



第6図-12



第9図-4



第9図-11

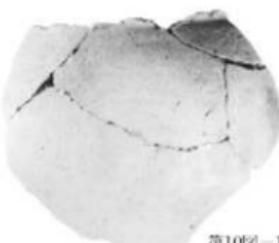


第9図-13



第9図-10

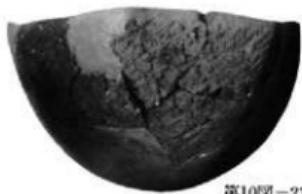
J-10k 地点出土土器・J-10f 地点出土土器 (縮尺5)



第10図-16



第9圖-15



第10圖-23



第10圖-18



第10圖-24



第10圖-19



第21圖-2



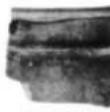
第21圖-16



第22圖-27



第22圖-31



第22圖-30



第22圖-24



第23圖-50

第23圖-61



第23圖-47



第23圖-46



第22圖-32



第23圖-65



第23圖-62



第23圖-64



第18图—1号甕棺



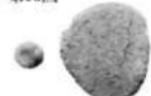
第19图—2号甕棺



第19图—3号甕棺



第13图



第20图—4号甕棺



第18图—5号甕棺

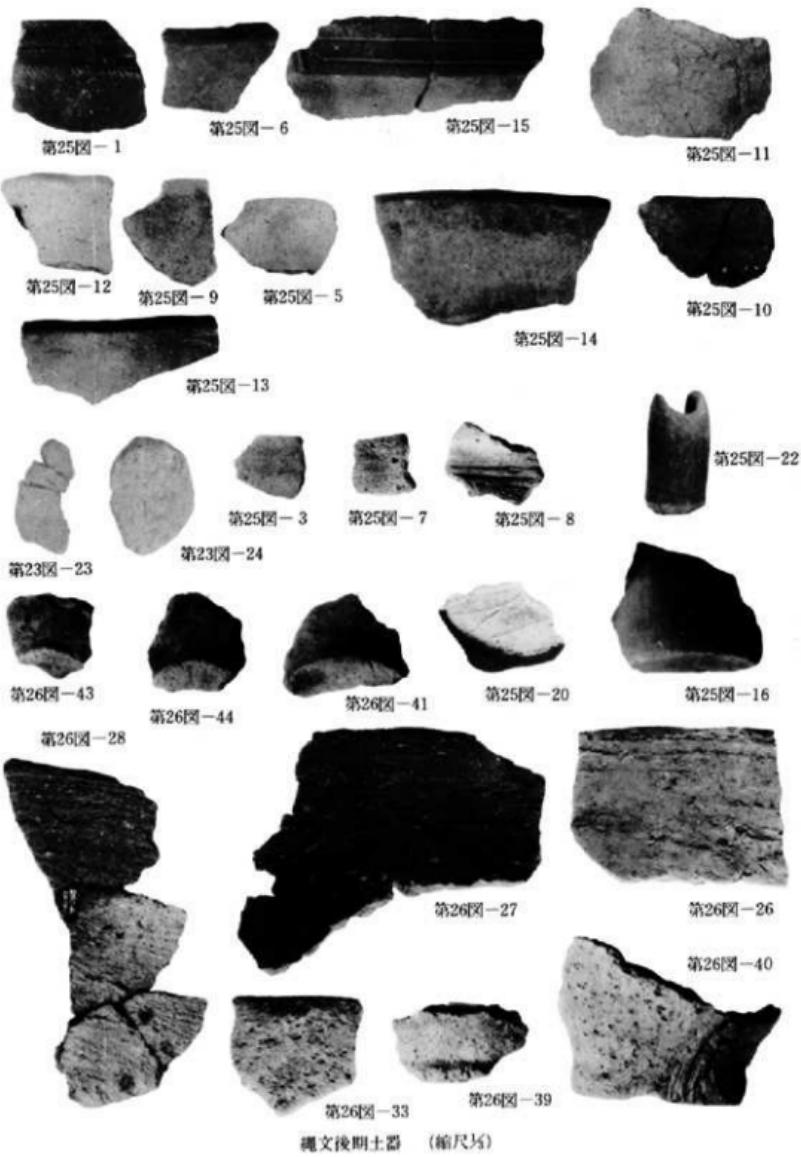


第18图—6号甕棺



第20图—7号甕棺

甕棺1～7号と1号甕棺内副葬品（縮尺不統一）



繩文後期土器 (縮尺1/2)



第33图-33



第29图-17



第33图-34



第28图-12



第28图-13



第28图-11



第28图-7

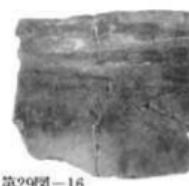
第29图-21



第29图-26



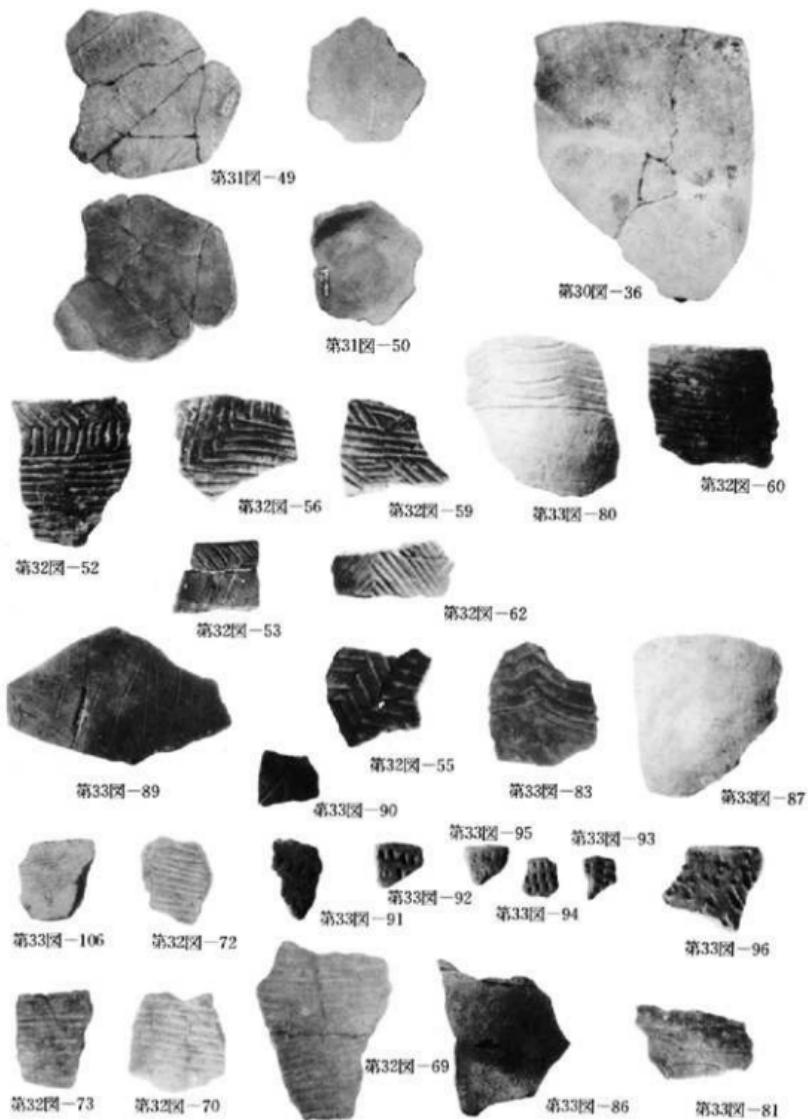
第29图-16



第29图-29

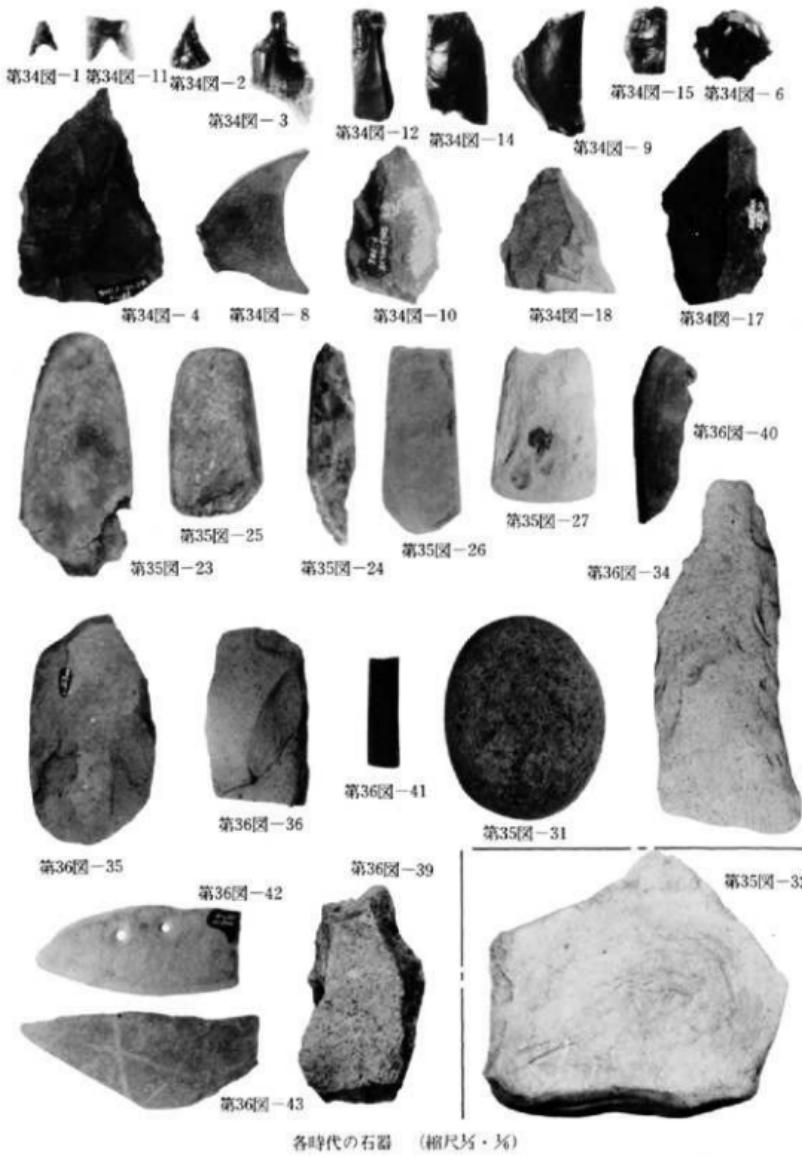


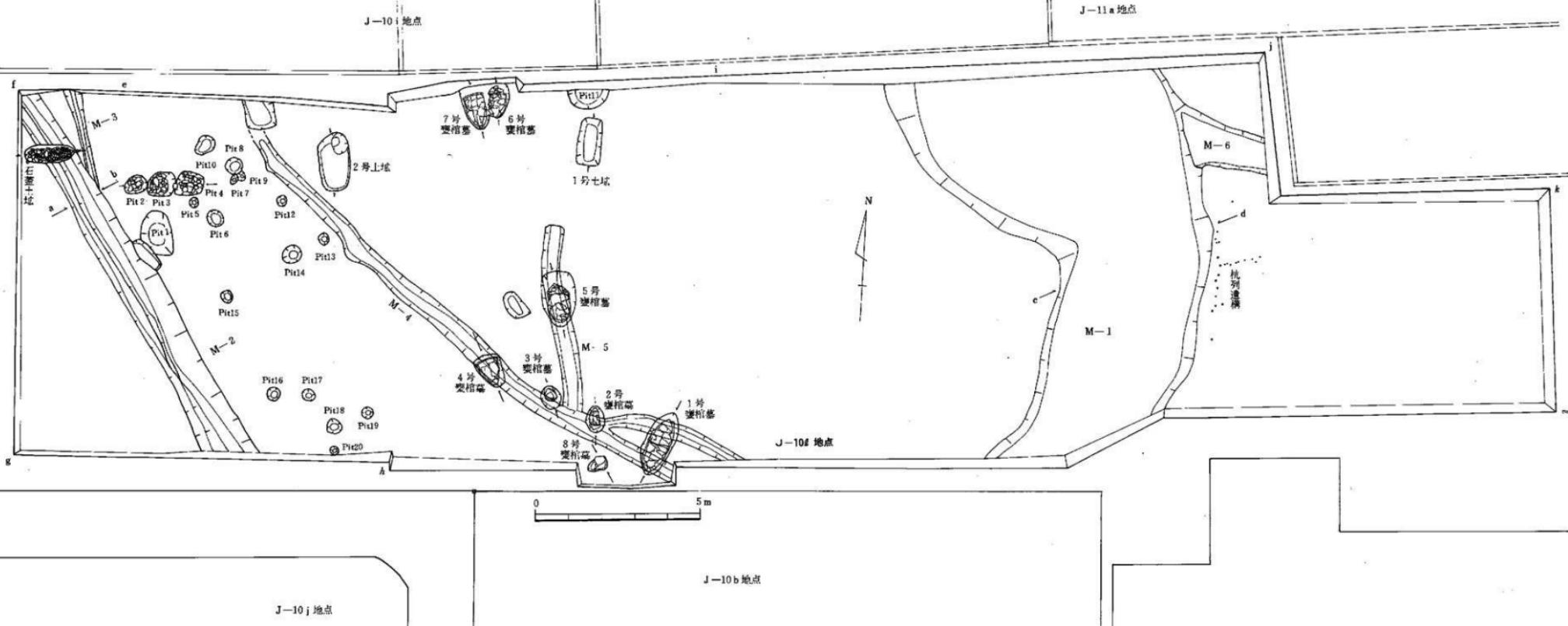
第29图-14



純文前中期土器 - (2) (縮尺3分)

PL. 16





附图 四號遜避墓J-10e 地点全图 (缩尺1 / 100)

福岡市西区
四箇周辺遺跡調査報告書

(4)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集

1981年（昭和56年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
印刷 栄光印刷株式会社

四箇周辺遺跡調査報告書 (4)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集

1981

福岡市教育委員会